

---

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第73集

---

森 下 遺 跡

---

2005.1

深谷市教育委員会

---

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第73集

---

森 下 遺 跡

---

2005.1

深谷市教育委員会

## 巻頭図版



調査区遠景



調査区全景

## 序

深谷市の北半には肥沃な妻沼低地が広がり、そこで栽培される作物は、毎年豊かな実りを私達にもたらしてくれます。現在は深谷葱が有名となり、全国各地に出荷されていますが、この地に遺跡が最も多くなる古墳時代から平安時代にかけては、主な作物は稻で、一面に水田が広がっていたと思われます。宮城県にある多賀城跡からは、幡羅郡から米が送られていたことを示す木簡が出土しており、幡羅郡を主とする妻沼低地が、穀倉地帯であったことを窺わせます。

今回調査された森下遺跡からは、小規模な集落跡と、その周りから用水路や水田の跡が出土しました。肥沃ではあるものの、乾くと非常に硬い粘土質の土壤を耕すのは当時の農民にとって容易なことではなかったでしょう。そして妻沼低地で実った米の一部は、律令時代には榛沢郡衙や幡羅郡衙に運ばれ、倉に納められました。近年その両郡衙跡が調査され、実態が徐々に明らかになりつつあります。しかし、農業を基盤とした地方の末端の一つであった森下集落は、郡衙跡からは分からない地方の姿を示しているのではないかでしょうか。

現在、深谷市には縄文時代から近現代までの様々な遺跡が残されております。こうした遺跡は、一度消滅すると二度と見ることのできないものであり、これを保護し、後世に伝えていくことは私たちの大きな課題であります。今回の発掘調査の成果を報告書というかたちにまとめ、広く市民の皆様にご紹介することで、郷土の歴史の古さやその優れた文化について、ご理解を深めていただきたいと存じます。また、この報告書が学術研究はもとより、学校、社会教育などの生涯学習活動を通じて、皆様が歴史を考えるための資料として役立てば、望外の喜びであります。

最後に、今回の発掘調査および報告書作成にあたり深いご理解とご協力をいただきました関係者の皆様に心から感謝し、お礼を申し上げまして序にかえさせていただきます。

平成17年1月

深谷市教育委員会

教育長 青木秀夫

## 例　　言

1. 本書は、埼玉県深谷市大字上敷免字本田856-1他における、消防本部庁舎建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書である。事業名は、森下遺跡発掘調査とした。
2. 確認調査は、国庫補助事業で行った。また、発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となって実施し、調査費用については深谷市・岡部町 共同事務組合が負担した。
3. 発掘調査期間は、平成14年11月5日から平成15年3月12日までである。
4. 発掘調査及び出土遺物の整理、報告書の執筆は知久裕昭が担当した。
5. 本書に掲載した挿図類の縮尺は、原則として次の通りである。  
遺構 住居跡・掘立柱建物跡・柵列跡・井戸・土壙 1／60、溝・道路跡・水田跡 1／300  
遺物 土師器・須恵器・陶磁器 1／4、縄文土器・弥生土器・石器 1／3
6. 遺物の実測図は、還元焰焼成の須恵器の断面を黒塗りで表現した。
7. 遺物観察表の記載は、以下の通りである。
  - ・計測値の単位はcmである。
  - ・器径、器高で（）を付したものは推定値を表す。
  - ・種別は土師器をH、還元焰焼成の須恵器をS、酸化焰焼成の須恵器をHSとした。
  - ・胎土は、肉眼で確認できた範囲での含有物を、以下のアルファベットで表した。  
A…白色粒子、B…赤色粒子、C…黒色粒子、D…石英、E…角閃石、F…片岩、  
G…白色針状物質、H…砂礫
8. 遺跡の基準点測量及び航空撮影は、中央航業株式会社に委託した。
9. 遺跡原点は、国家方眼座標X=23320.000、Y=-49040.000である。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
10. 遺物の注記、及び原図における遺構の略号は、次の通りである。  
竪穴住居跡…SJ、掘立柱建物跡…SB、柵列跡…SA、溝…SD、道路跡…SR、  
井戸…SE、土壙…SK
11. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の諸氏から数々のご指導ご助言を賜った。  
古池晋禄　　澤出晃越　　竹野谷俊夫　　鳥羽政之　　永井智教　　平田重之  
宮本直樹　　(敬称略)

## 発掘調査の組織

調査主体者	深谷市教育委員会	教 育 長	蜂須 栄 (平成14~15年度)
			青木 秀夫 (平成16年度)
		教育次長	工藤 友明 (平成14年度)
			古川 国康 (平成15~16年度)
		次 長	大澤 芳正
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課 長	八須 信治 (平成14年度)
			吉村 善也 (平成15年度)
			山口 清 (平成16年度)
		主幹兼課長補佐	吉村 善也 (平成14年度)
		課長補佐	田口 英夫 (平成14~15年度)
			原 常博 (平成15~16年度)
			猪之塚 昇 (平成16年度)
		文化財保護係長	木村 文夫 (平成14年度)
			土屋 次雄 (平成15~16年度)
		主 任	古池 晋禄 (平成14~15年度)
		主 任	青木 克尚
		主 任	畠元 直大 (平成16年度)
		主 事	矢野 有紀 (平成14~15年度)
		主 事	荻野 直美 (平成16年度)
		主 事	知久 裕昭

### 調査参加者

阿部ルリ子	池田 敦子	大澤 大美	大島 周子	小野寺和子	倉上多美子
栗原 知恵	小島 和己	小沼 和子	小林 里枝	島崎 祐子	砂田伊久子
関口由美子	園部 則子	高田 秀子	滝田 悅子	田中香代子	知久 祥子
浜野 光子	福島祐美子	藤浦 春枝	藤野ウメ子	棟安 祥子	横山 明美
横山 時彦	吉田 稔	吉野九の枝	吉野真由美		

## 目 次

序

例言

発掘調査の組織

I	発掘調査の経過	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	発掘調査の経過	1
II	深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相	2
III	縄文・弥生時代の遺物	14
IV	古墳時代以降の遺構と遺物	16
1	住居跡	16
2	掘立柱建物跡	18
3	柵列跡	20
4	溝	23
5	道路跡	34
6	井戸	34
7	土壙	34
8	水田跡	34
9	調査区出土遺物	36
VI	結語 森下条里の復元	38
付編	森下遺跡におけるテフラ分析	43
報告書抄録		

## 挿図目次

第1図	森下遺跡及び周辺の遺跡分布図	3	第12図	水田跡断面図	14
第2図	森下遺跡の位置と発掘調査区	4	第13図	縄文・弥生時代の遺物	15
第3図	森下遺跡全体測量図	5	第14図	第1号住居跡及び出土遺物	17
第4図	平面測量図(1)	6	第15図	第1号掘立柱建物跡	18
第5図	平面測量図(2)	7	第16図	第2号掘立柱建物跡及び出土遺物	19
第6図	平面測量図(3)	8	第17図	第3・4号掘立柱建物跡(1)	21
第7図	平面測量図(4)	9	第18図	第3・4号掘立柱建物跡(2) 及び出土遺物	22
第8図	平面測量図(5)	10	第19図	第1号柵列跡	23
第9図	溝断面図(1)	11	第20図	第17・26号溝	30
第10図	溝断面図(2)	12	第21図	溝出土遺物(1)	31
第11図	溝断面図(3)	13			

第22図 溝出土遺物（2）	32	第26図 調査区出土遺物	37
第23図 井戸・土壤実測図	35	第27図 森下遺跡の変遷（1）	39
第24図 道路跡・井戸・土壤出土遺物	36	第28図 森下遺跡の変遷（2）	40
第25図 D-4グリッド遺物出土状況	36	第29図 条里地割推定復元図	41

## 表 目 次

第1表 森下遺跡及び周辺の遺跡一覧表	3	第3表 溝出土遺物観察表	33
第2表 第1号住居跡出土遺物観察表	16	第4表 調査区出土遺物観察表	37

## 図 版 目 次

卷頭図版 調査区遠景 調査区全景

図版1 調査区東部（1） 調査区東部（2） 調査区東部（3） 調査区東部（4） 調査区東部（5）  
調査区東部（6） 調査区中央部（1） 調査区中央部（2）

図版2 調査区中央部（3） 調査区中央部（4） 調査区中央部（5） 調査区西部（1） 調査区西部（2）  
調査区西部（3） 調査区西部（4） 調査区南部（1）

図版3 調査区南部（2） 第13図1出土状況 第1号住居跡遺物出土状況 第1号住居跡  
第1号掘立柱建物跡 第2号掘立柱建物跡 第3号掘立柱建物跡 第4号掘立柱建物跡

図版4 第1号柵列跡 第2号土壤 第1号井戸 第2号井戸 第1号溝（1） 第1号溝（2） 第1号溝（3）  
第1号溝SPA-A'

図版5 第1号溝SPD-D' 第1号溝SPE-E' 第1号溝SPH-H' 第1号溝SPI-I'  
第1号溝SPJ-J' 第1号溝遺物出土状況 グリッド遺物出土状況 調査風景

図版6 繩文・弥生土器 石器 1号住居跡1 1号住居跡4 1号住居跡5 1号住居跡6  
1号住居跡出土遺物

図版7 2・3号掘立柱建物跡出土遺物 1号溝1 1号溝2 1号溝4 1号溝3 1・19号溝5  
1・19号溝7 1・19号溝8 1・19号溝9 1・19号溝10 1・19号溝11 1・19号溝12  
6号溝21 19号溝36 39号溝39 43号溝40

図版8 溝出土遺物 道路跡・土壤・井戸出土遺物 調査区1 調査区2 調査区出土遺物

# I 発掘調査の経過

## 1 発掘調査に至る経過

深谷市は、埼玉県北部に位置する、総面積69.4km<sup>2</sup>、人口約104,500人の都市である。当地は農業、工業とともに盛んで、古くから深谷ネギの産地としても有名である。歴史的に見ても、縄文・弥生時代をはじめ、古墳時代～平安時代、深谷上杉氏の拠点であった室町・戦国時代、宿場町として栄えた江戸時代、そして近・現代まで多くの遺跡、文化財が残され、非常に重要な土地であったことが窺える。近代日本経済界を築いた渋沢栄一の生地としても良く知られる。

森下遺跡は、JR深谷駅より北へ約2.4m、妻沼低地に立地する。標高は約34m、遺跡の範囲は約83,000m<sup>2</sup>と推定される。これまで埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって調査が行われ、中央の窪地を挟み、集落が遺跡の東西両端に位置することが確認されている。県の調査では、東端の地点から古墳時代中期の住居跡8軒、奈良・平安時代の掘立柱建物跡3棟、埋甕2基、中世の井戸跡1基、土壙22基、中近世の溝4条等、今回の調査区に近い西端の地点から、奈良・平安時代の住居跡4軒、掘立柱建物跡14棟、またその他に溝4条、土壙10基等が出土している。中間の地点からは、水田跡の可能性がある遺構が検出されている。

そのため、深谷市教育委員会では、森下遺跡周辺の広い範囲を重要な埋蔵文化財包蔵地であると考え、事前調査等を行ってきた。

平成13年10月、森下遺跡地内の深谷市大字上敷免字本田856-1他で消防本部庁舎建設工事の実施が明らかとなつた。深谷市教育委員会は開発側の深谷市・岡部町共同事務組合との協議を経て、平成14年6月17日～21日に当該地の確認調査を実施した。調査の結果、工事予定地の大部分で、溝跡や土師器等が検出された。この結果を踏まえ、現状保存或いは発掘調査の実施につ

いて、市教育委員会と深谷市・岡部町共同事務組合とで協議を行い、現状保存が不可能と思われる部分について、市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することで合意した。

市教育委員会は直ちに、文化財保護法第58条の2の規定に基づき、埋蔵文化財発掘調査通知（平成14年11月7日付深教生発第845号）を提出し、準備に入った。

なお、埼玉県教育委員会教育長から、平成14年11月20日付教文第3-727号で指示通知を受けた。

## 2 発掘調査の経過

平成14年度に行われた、森下遺跡発掘調査の経過は、概ね以下の通りである。

11月8日（金）～12月18日（水）表土剥ぎ。

11月14日（月）器材搬入。

11月8日（金）～3月10日（月）遺構確認、遺構調査、写真撮影、図面測量。

3月12日（水）補足調査。器材撤収。

調査は寒風吹きすさぶ中行われた。調査面積は約8,000m<sup>2</sup>である。妻沼低地の土壤は粘質土のため、乾くと硬い土壤であることが予想されていたが、それに加えて、調査区東部の自然堤防と考えられる地点では、地山や覆土に砂礫が多く含まれていたため、調査には困難が伴った。しかし、住居跡や掘立柱建物跡の他に多数の溝跡が確認され、集落と周辺に広がる景観の一端を示すことができたことは大きな成果であると考えられる。

今回の発掘調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただいた方々をはじめ、この文化遺産を記録保存し、後世に伝える作業のためにご協力いただいた全ての方々に敬意を表する。

## II 深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相

深谷市の地形を概観すると、市のはば中央部を東西に走るJR高崎線付近を境として、南側に櫛挽台地が広がり北側には妻沼低地が形成されている。櫛挽台地は荒川によって作られた古い扇状地が浸食されてできた沖積台地で、寄居付近を頂部としている。妻沼低地は、利根川の自然堤防及び沖積低地であり、加須低地と並び利根川の中流低地の一つに数えられる。

櫛挽台地は構造的には、北西側の武藏野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、南東側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼJR高崎線沿いの崖線で比高差5～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8mほど延びていて、比高差2～5mをもって妻沼低地と接している。接線付近での標高は櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面は標高70m付近より発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川等が北流していて、櫛挽面北端部は南北に台地を開析する浅い谷が発達したものと考えられる。発掘調査で埋没谷が検出されることも多い。また、末端には所謂先端湧水と認められる池等もある。寄居面にはこうした谷筋はほとんど認められず、妻沼低地と接する台地末端部を除き、水利上は生活に不向きだったと考えられる。

妻沼低地は、利根川右岸に広がる肥沃な低地である。南は熊谷市付近を境として秩父山塊に連なる丘陵や台地と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に接する。妻沼低地の南端に櫛挽面、東に寄居面を控える一画に深谷市の中心部があり、周辺では住宅地が増加している。妻沼低地は現在ではかなり平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防が発達したものと考えられる。

深谷市内では、旧石器時代の遺跡はほとんど確認されておらず、幡羅遺跡でナイフ形石器が1点出土したのみである。縄文時代では、東方城跡で草創期の可能

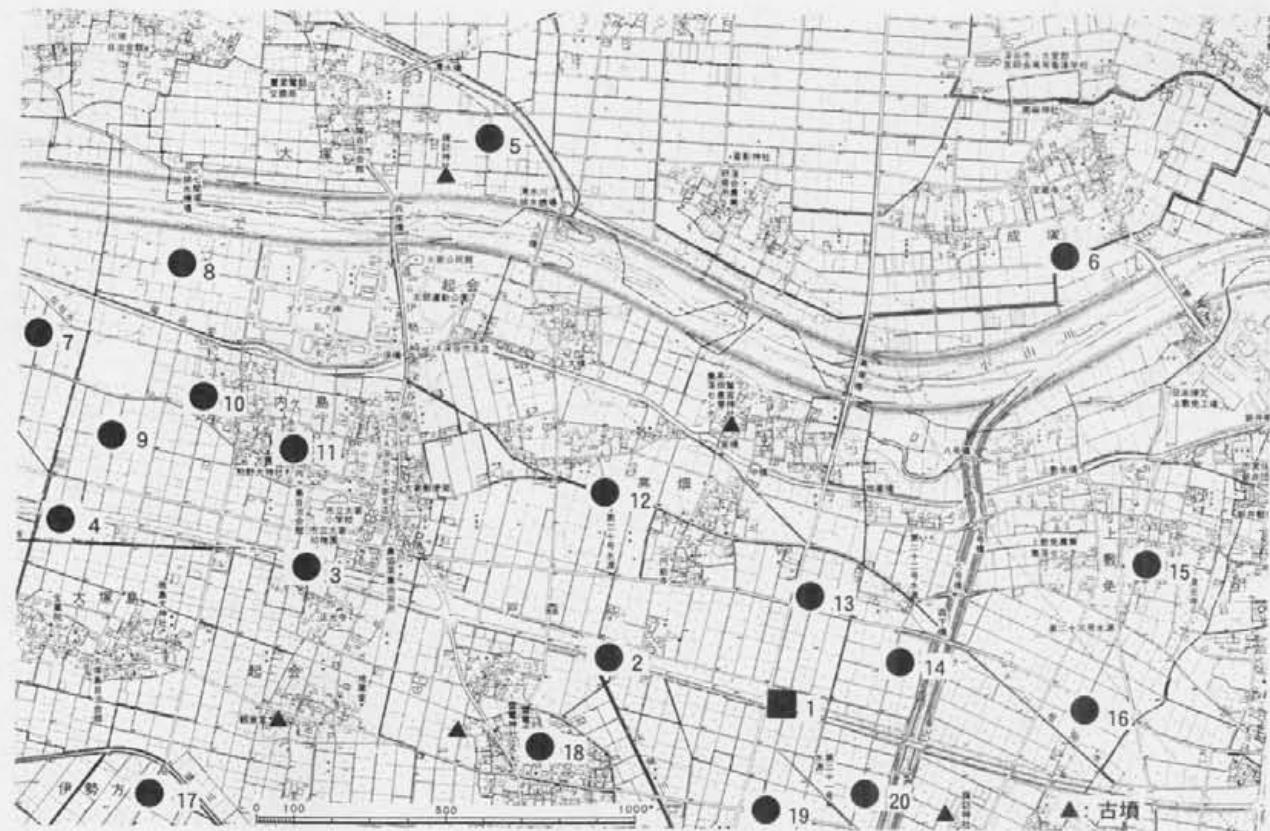
性がある尖頭器が出土している。共に櫛挽台地の先端部に位置している。また、それより南西に位置する小台遺跡からは、早期押型文土器や前期黒浜式土器、諸磯式土器の破片が出土している。黒浜式土器は、妻沼低地末端部に位置する深谷城跡からも出土しており、該期には生活域が拡大していることが考えられる。また、小台遺跡に隣接する割山遺跡からも諸磯a式土器が多く出土することが知られている。

縄文中期、特に後半になると遺跡は増大する。中でも小台遺跡は、多量の土器や石器を包含する埋没谷を中心に住居や土壙群が展開し、集落の規模はこれまで市内で確認された中で最大のものである。遺構は中期中葉～後期前葉までのものがこれまでに検出されている。小台遺跡と時期的に重なる遺跡は数多く、小河川を挟んで小集落が多数分布していたか、集落が移動していたものと思われる。

縄文後・晩期になると、縄文人の生活域の中心は櫛挽台地から妻沼低地へと移っていく。明戸東遺跡では後期初頭の住居跡、上敷免北遺跡では後期後葉の遺物包含層が検出される等している。そして16の上敷免遺跡では、包含層から在地の後・晩期の資料に混じり、東海系条痕文土器が検出されたり、埼玉県では初の遠賀川系の壺が検出される等、他地域との交流を考えさせられる。また遺構が検出されなくても、妻沼低地にある遺跡を調査すると、ほとんどの場合に縄文後期の土器片が検出される状況である。

弥生時代に入ると、上敷免遺跡で中期の再葬墓と、若干時期が下る住居跡が同一の自然堤防上に確認され、弥生時代の集落のあり方を考える上で注目される。弥生時代後期から古墳時代中期の遺跡の分布状況は明確ではないが、古墳時代前・中期の遺跡は最近調査例が増加している。

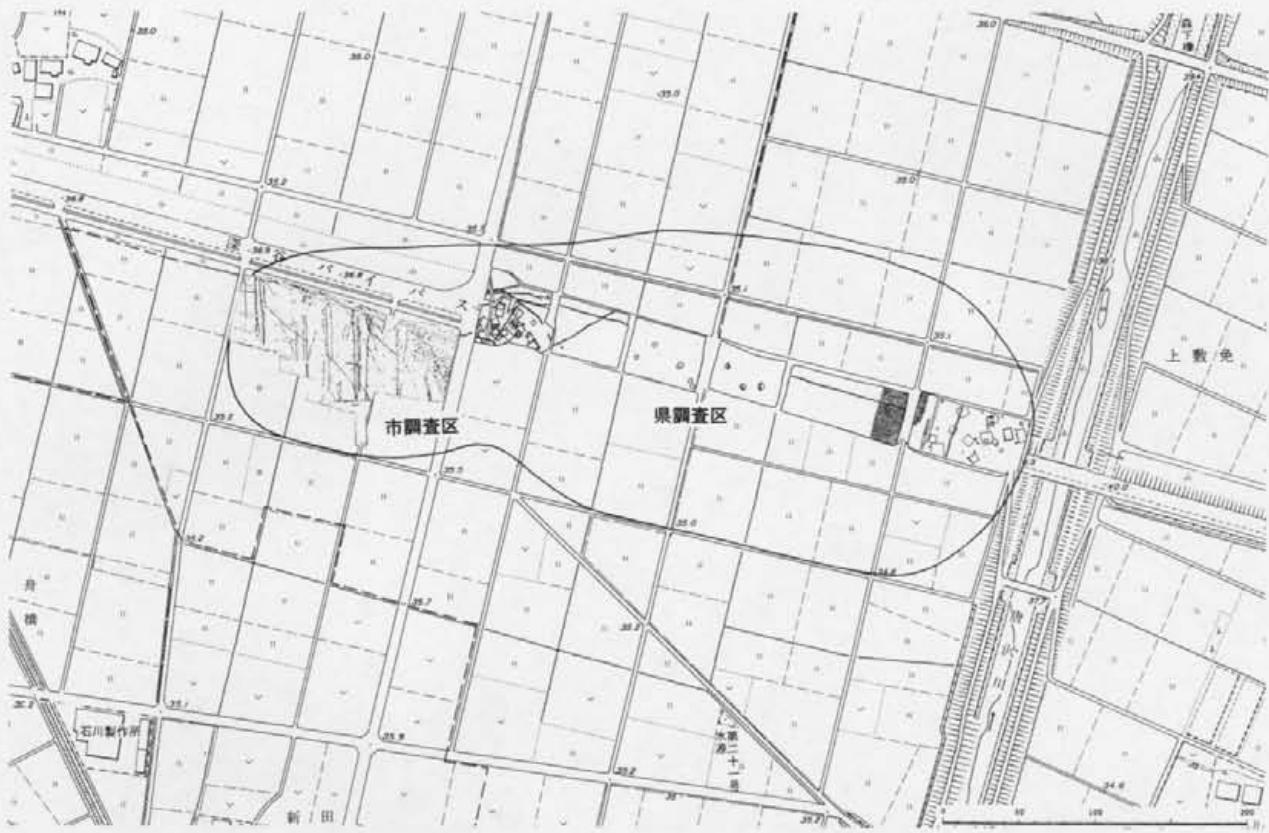
古墳時代後期前半になると遺跡数は爆発的に増加し、妻沼低地の自然堤防上に大規模な集落が営まれる。ま



第1図 森下遺跡及び周辺の遺跡分布図

番号	名 称	時 代	番号	名 称	時 代
1	森 下 遺 跡	縄文後期、弥生、古墳中期、奈良、平安	11	内ヶ島氏館跡	平安
2	戸森松原遺跡	古墳前期・中期、奈良、平安	12	No.004 遺 跡	弥生後期、古墳後期～平安
3	起 会 遺 跡	古墳中期～平安	13	No.141 遺 跡	古墳後期～平安
4	矢 島 南 遺 跡	古墳後期～平安	14	上敷免森下遺跡	弥生中期、古墳後期
5	道 仙 遺 跡	古墳後期～平安	15	上敷免北遺跡	縄文後期・晚期、古墳後期～平安
6	No.123 遺 跡	古墳後期～平安	16	上敷免 遺 跡	縄文中期・晚期、弥生、古墳後期～平安
7	No.136 遺 跡	古墳後期～平安	17	堀 東 遺 跡	縄文中期・後期、弥生前期・中期、平安
8	No.138 遺 跡	古墳後期～平安	18	No.008 遺 跡	古墳後期～平安
9	No.140 遺 跡	古墳後期～平安	19	三沼西 遺 跡	縄文後期、弥生、古墳前期・中期、平安
10	No.139 遺 跡	古墳後期～平安	20	No.142 遺 跡	古墳後期～平安

第1表 森下遺跡及び周辺の遺跡一覧表



第2図 森下遺跡の位置と発掘調査区

た、この時期に小規模な円墳が数多く造られるようになり、幾つかの古墳群を形成する。中でも代表的なのは、櫛挽台地の先端部、深谷市中央付近の大字原郷周辺に形成される木の本古墳群である。大部分は20~30m規模の円墳で、台地の縁辺に沿って構築される。

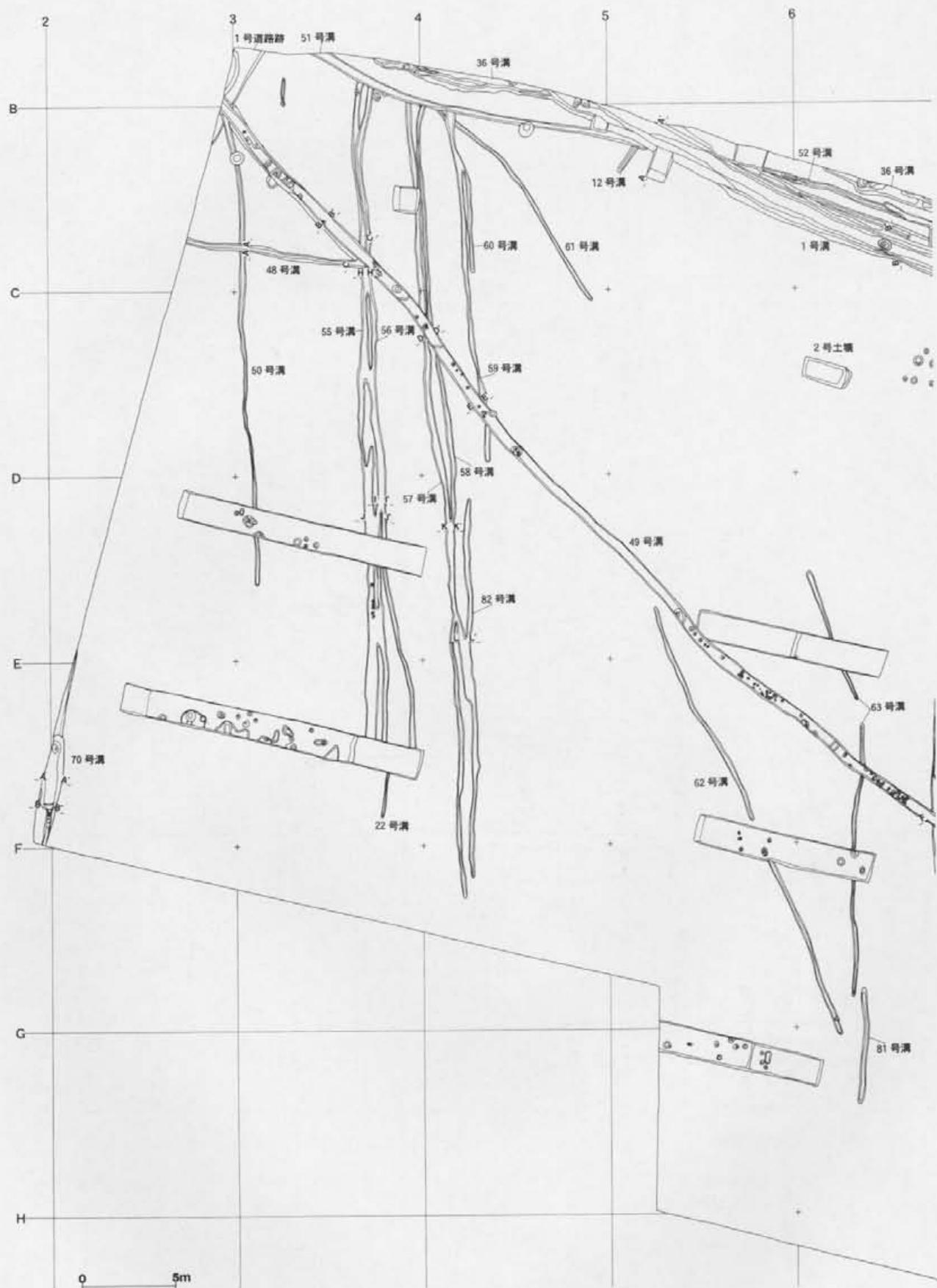
7世紀頃には、大集落は縮小傾向になり、代わって宮ヶ谷戸遺跡や東川端遺跡、清水上遺跡など、幡羅郡衙跡と推定される幡羅遺跡に近い位置に集落が営まれるようになる。律令期には、深谷市の東半部は幡羅郡、西半部は榛沢郡に属すると考えられる。榛沢郡の郡衙正倉跡は岡部町の中宿遺跡で発見されている。また幡羅郡の郡衙正倉跡も、深谷市大字東方で検出されている。平成15年度の調査では、2重の溝で方形に区画された施設や、それに先行する長大な側柱建物跡などが検出されている。また、新屋敷東遺跡からは、正倉別院の可能性のある大型建物跡が検出されている。

平安時代末期以降は、猪俣党武士団の居館が各地に出現する。代表的なのは、県指定史跡にもなっている

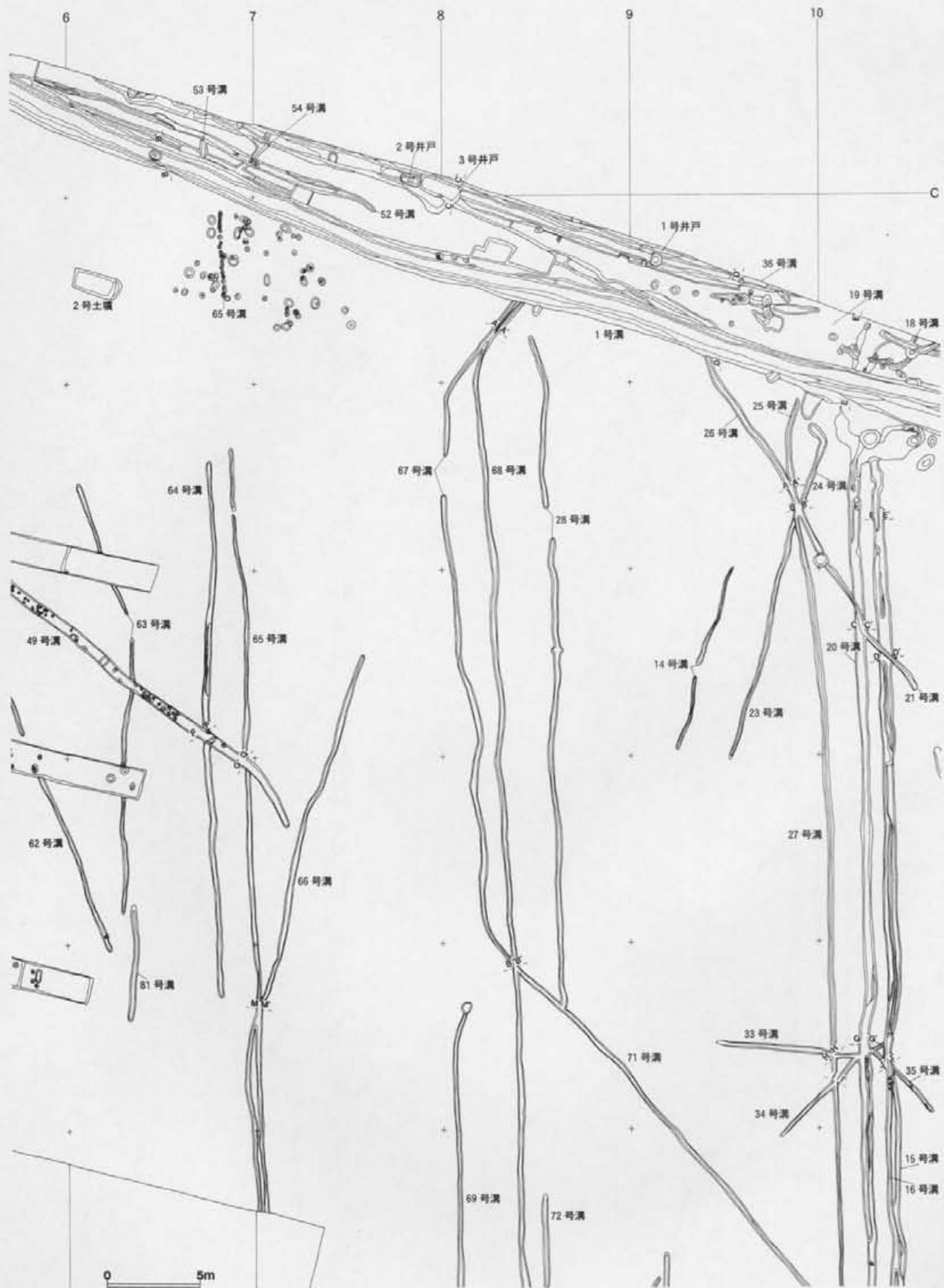
人見館跡である。幡羅館跡もその一つと言われるが、明らかではない。そして室町時代以降は深谷上杉氏の本拠地となる。深谷上杉氏は、当初、庁鼻和城に居を構えたと言われるが、5代目房憲の時に、古河公方勢力との戦闘に備え、より堅固な深谷城に移ったとされる。深谷城跡の北東約1kmには、深谷上杉氏の宿老岡谷香丹が築いたと言われる皿沼城跡があり、北方の守りを堅固なものにしている。また、香丹が隠居後に移ったとされる曲田城跡が北西にある。東に約3kmの台地の先端部には、東方城跡がある。大沼弾正忠屋敷跡は深谷上杉氏家臣の館跡であり、この他にも、周辺に家臣の館が分布していた可能性がある。南方約1.8kmには、家臣の館跡である秋元氏館跡、南西約2.8kmには、古河公方勢力を牽制し人見地域を防衛するために築かれたと考えられる館跡が検出された押切遺跡が存在する。また、割山西遺跡では、伝承等が一切残っていないが、方形の区画溝が検出され、館跡と考えられている。



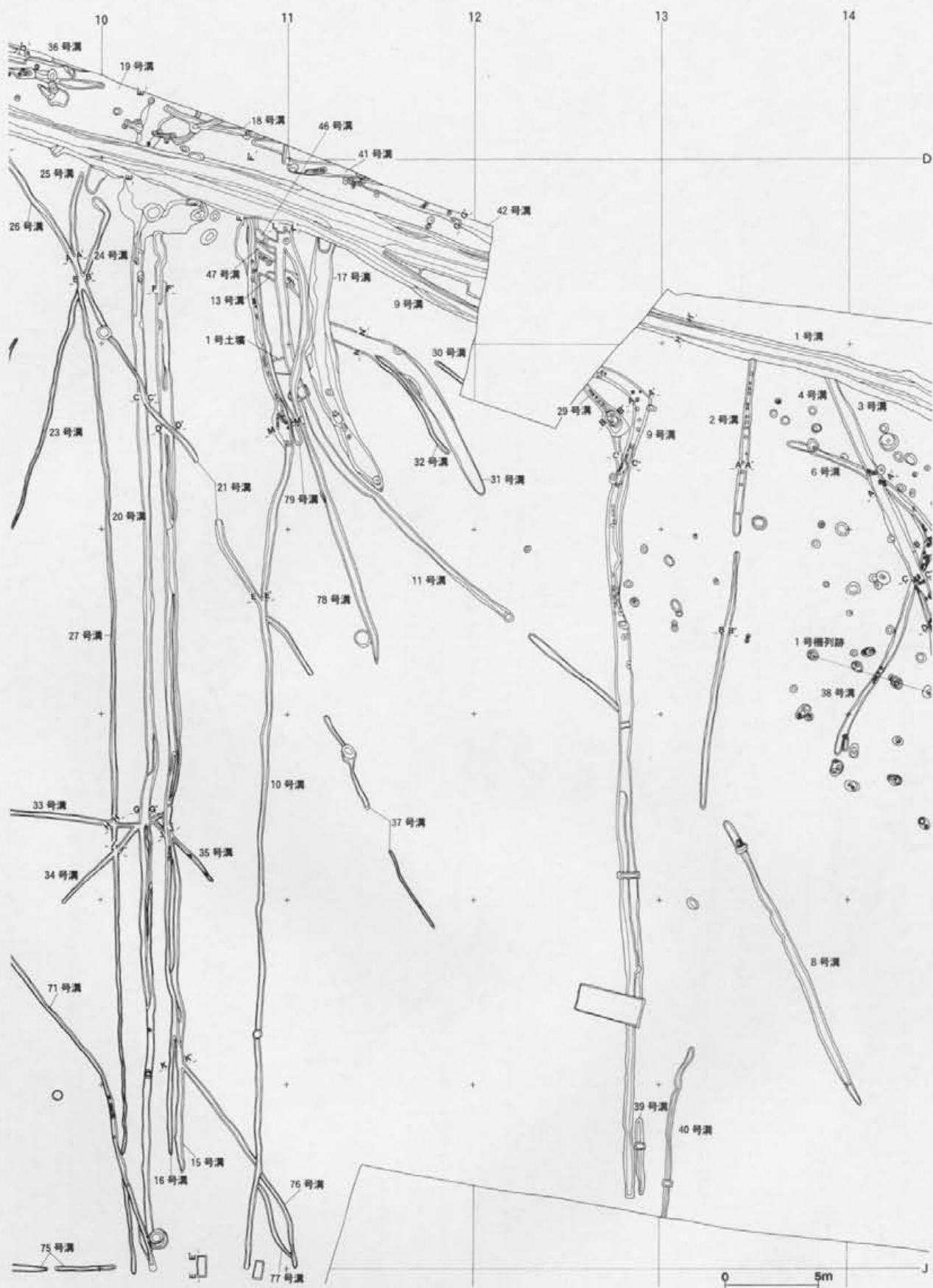
第3図 森下遺跡全体測量図



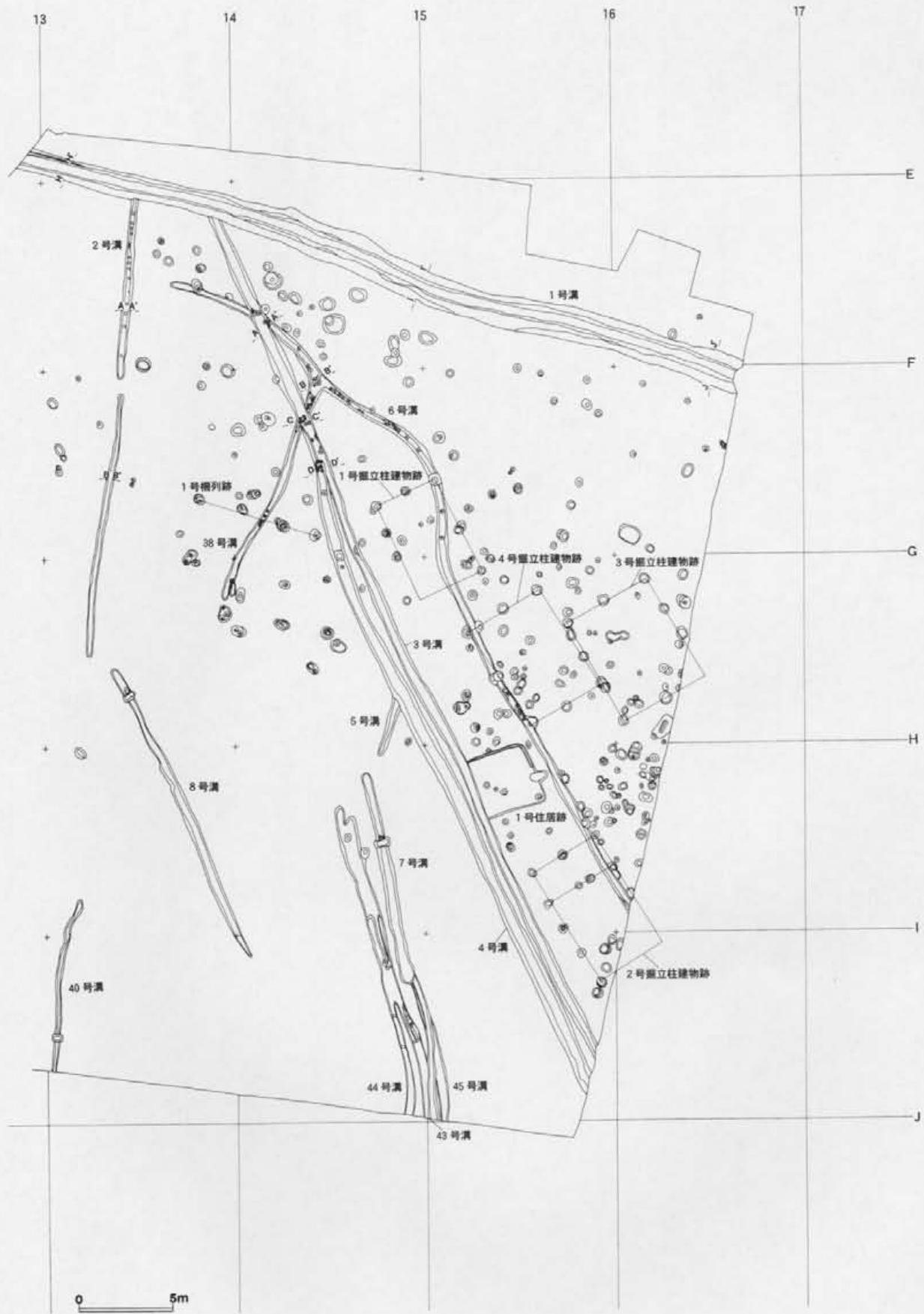
第4図 平面測量図(1)



第5図 平面測量図(2)



第6図 平面測量図(3)

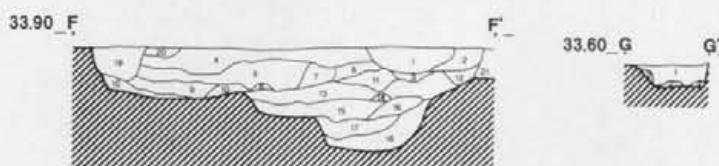
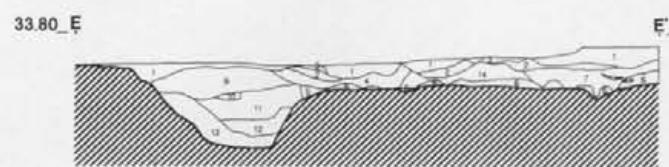
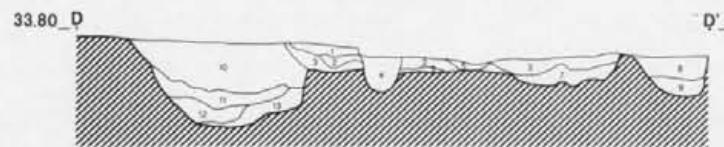
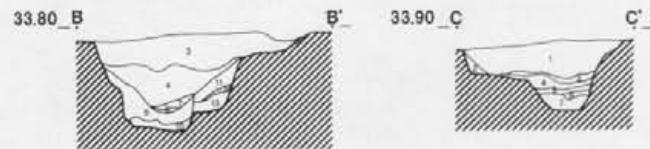
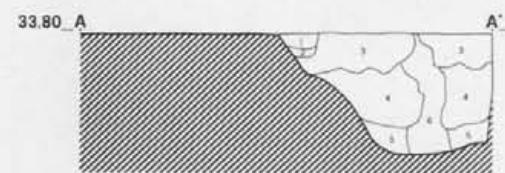


第7図 平面測量図(4)



第8図 平面測量図(5)

第1・19・36・42号溝

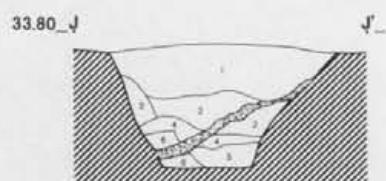
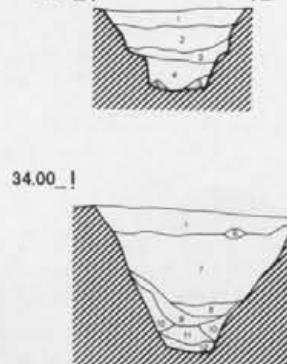


S.P.F.

- 1層 灰褐色土 砂を多量に含む。
- 2層 灰白色土 白色粒を含む。
- 3層 灰色土 白色粒、酸化鉄粒を少し含む。
- 4層 褐灰色土 大山灰を含む。
- 5層 灰褐色土 酸化鉄粒を多く含む。
- 6層 灰色土 ローム粒を多く含む。
- 7層 灰白色土 酸化鉄粒を含む。
- 8層 灰色土 酸化鉄粒をわずかに含む。
- 9層 灰色土 白色粒をわずかに含む。
- 10層 黄白色土 黄白色粘土ブロック、灰色粘土で構成される。
- 11層 灰褐色土 酸化鉄粒を多く含む。
- 12層 茶褐色土 痛落壁か。
- 13層 褐灰色土 ローム粒を少し含む。
- 14層 粘灰色土 酸化粒を含む。
- 15層 灰褐色土 ローム粒、酸化鉄粒をやや多く含む。
- 16層 灰白色土 酸化粒をわずかに含む。
- 17層 灰色土 ローム粒を多く含む。
- 18層 褐灰色土 ローム粒を少し含む。酸化鉄粒を含む。
- 19層 褐灰色土 白色粒を含む。
- 20層 灰色土 酸化鉄粒を含む。
- 21層 灰茶褐色土 酸化粒、白色粒を少し含む。

S.P.G.

- 1層 茶褐色土 茶褐色土粒をやや多く含む。
- 2層 黄褐色土 ローム粒を多く含む。



S.P.A-S.P.B

- 1層 沈色土 白色粒、酸化鉄粒を少し含む。
- 2層 灰灰色土 白色粒、酸化鉄粒を少し含む。
- 3層 灰茶褐色土 マンガンを多量に含む。白色粒を含む。
- 4層 灰褐色土 ローム粒、酸化鉄粒を少し含む。
- 5層 灰色土 ローム粒、酸化鉄粒を少し含む。
- 6層 青灰色土 酸化鉄粒を含む。白色粒を少し含む。
- 7層 黄灰色土 ローム粒をやや多く含む。酸化鉄をわずかに含む。
- 8層 灰褐色土 ローム粒、酸化鉄を含む。
- 9層 黄灰色土 ローム粒を多量に含む。
- 10層 青灰色土 ローム粒を含む。
- 11層 灰色土 ローム粒を多量に含む。酸化鉄をわずかに含む。
- 12層 黄灰色土 ローム粒を多く含む。
- 13層 青灰色土 ローム粒、ロームブロック(1~3cm)をやや多く含む。

S.P.C

- 1層 灰白色土 白色粒を多く含む。ローム粒を少し含む。
- 2層 雜褐色土 ローム粒をわずかに含む。
- 3層 灰黃褐色土 ローム粒を多く含む。白色粒を少し含む。
- 4層 灰白色土 ローム粒、白色粒を含む。
- 5層 灰黃褐色土 ローム粒を多く含む。
- 6層 灰白色土 ローム粒、白色粒をわずかに含む。
- 7層 灰褐色土 ローム粒をやや多く含む。鐵土粒を少し含む。

S.P.D

- 1層 灰色土 酸化鉄粒を多く含む。白色粒を少し含む。
- 2層 灰褐色土 マンガン。酸化鉄粒を含む。
- 3層 純灰褐色土 マンガンをやや多く含む。
- 4層 青灰色土 酸化鉄を含む。
- 5層 灰褐色土 酸化鉄粒をやや多く含む。鐵土粒を含む。
- 6層 純灰褐色土 酸化鉄粒をやや多く含む。
- 7層 灰色土 ローム粒を含む。
- 8層 灰白色土 白色粒を含む。
- 9層 純褐色土 酸化鉄粒を含む。
- 10層 灰褐色土 マンガンを多量に含む。
- 11層 灰褐色土 酸化鉄粒をやや多く含む。酸化鉄を少し含む。
- 12層 灰色土 ローム粒、酸化鉄粒を含む。
- 13層 灰褐色土 ローム粒、酸化鉄粒をやや多く含む。

S.P.E

- 1層 灰褐色土 酸化鉄粒を多量に含む。砂礫を含む。
- 2層 灰白色土 細砂を多く含む。
- 3層 灰色土 酸化鉄粒を少し含む。
- 4層 灰色土 ローム粒、酸化鉄粒を少し含む。
- 5層 褐灰色土 酸化鉄粒を含む。
- 6層 黄褐色土 ローム粒を多く含む。酸化鉄粒を少し含む。
- 7層 黄色土 酸化鉄粒をやや多く含む。
- 8層 純灰褐色土 酸化鉄粒を少し含む。
- 9層 灰色土 酸化鉄粒を多く含む。
- 10層 黄褐色土 砂を多く含む。
- 11層 純灰褐色土 酸化鉄粒を多量に含む。ローム粒を少し含む。
- 12層 黄色土 ローム粒を多く含む。
- 13層 純灰褐色土 酸化鉄粒を多く含む。ローム粒をやや多く含む。酸化鉄を少し含む。
- 14層 灰褐色土 酸化鉄粒、砂を多量に含む。

S.P.H-S.P.I

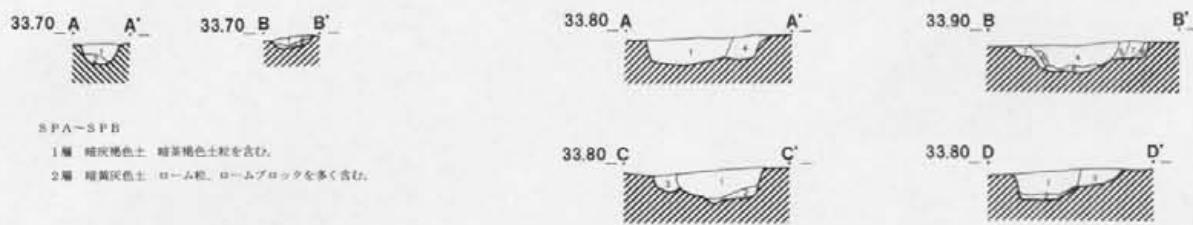
- 1層 純灰褐色土 酸化鉄をわずかに含む。
- 2層 純灰褐色土 ローム粒。鐵土粒をわずかに含む。
- 3層 純灰褐色土 ローム粒をやや多く含む。
- 4層 純灰褐色土 ローム粒を含む。酸化鉄を少し含む。
- 5層 灰色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。
- 6層 純灰褐色土 酸化鉄をやや多く含む。
- 7層 純灰褐色土 砂(1~3cm)を多く含む。
- 8層 灰褐色土 砂(1~3cm)を少し含む。
- 9層 灰褐色土 砂(1~3cm)をやや多く含む。
- 10層 灰色土 砂礫がなる。壁面崩落土か。
- 11層 灰褐色土 砂(3cm)をわずかに含む。
- 12層 灰褐色土 サを含む。

0 2m

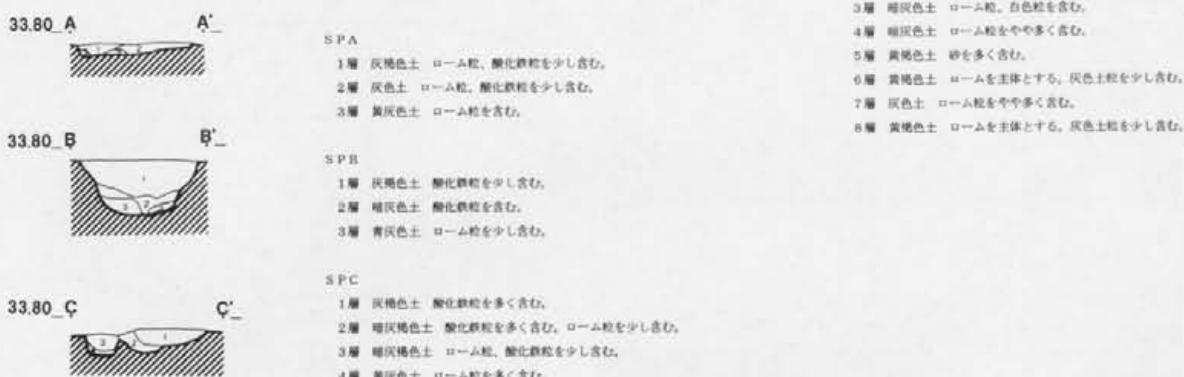
第9図 溝断面図(1)

第2号溝

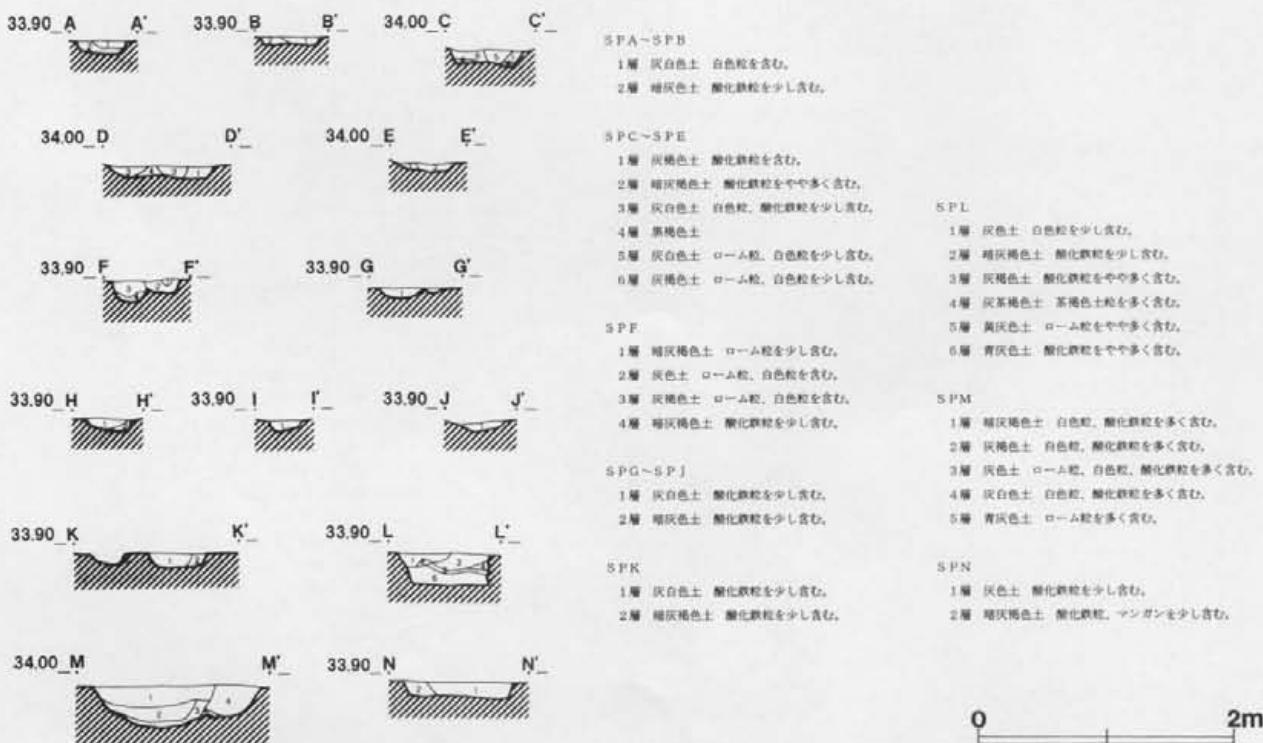
第3・4・6・38号溝



第9・29号溝

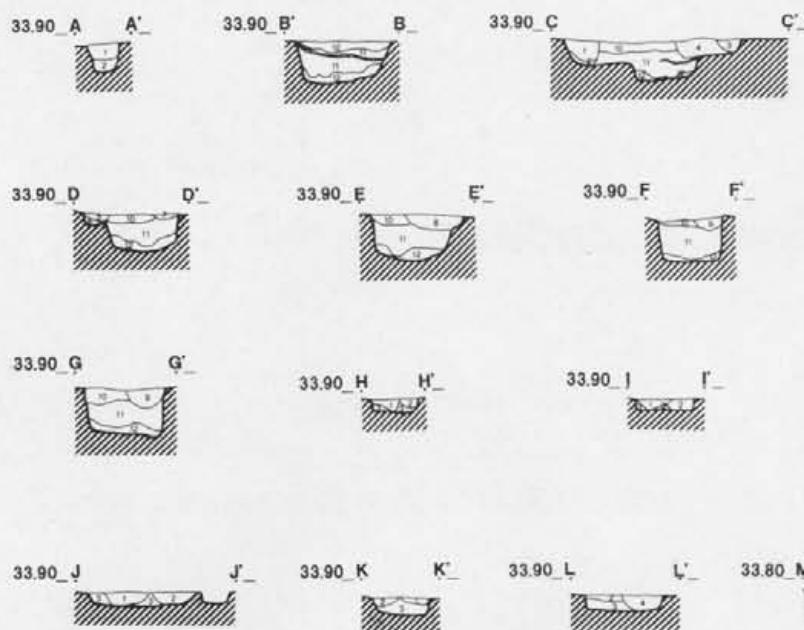


第10~12・15・16・20・21・23~27・31~35・78・79号溝



第10図 溝断面図(2)

第22・48・49・55・56・65・66・82号溝



S.PA~S.PG

- 1層 灰白色土 白色粒を少し含む。
- 2層 灰褐色土 ローム粒を含む。
- 3層 灰白色土 白色粒を少し含む。
- 4層 灰褐色土 白色粒をわずかに含む。
- 5層 灰白色土 白色粒、酸化鉄粒をわずかに含む。
- 6層 増灰褐色土 酸化鉄粒を少し含む。
- 7層 灰白色土 白色粒をわずかに含む。
- 8層 灰褐色土 酸化鉄粒を含む。
- 9層 灰白色土 白色粒、酸化鉄粒、マンガンを含む。

S.PH~S.PJ

- 1層 灰白色土 酸化鉄粒を少し含む。
- 2層 灰白色土 酸化鉄粒を少し含む。(1層とはば同質。)
- 3層 増灰茶色土 酸化鉄粒を少し含む。
- 4層 灰褐色土 酸化鉄粒をやや多く含む。

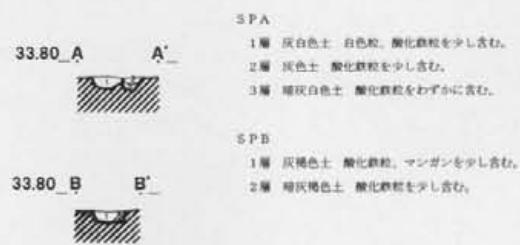
S.PK~S.PL

- 1層 灰白色土 白色粒、酸化鉄粒を少し含む。
- 2層 灰白色土 白色粒、酸化鉄粒を少し含む。(1層とはば同質。)
- 3層 増灰茶色土 酸化鉄粒を少し含む。
- 4層 灰褐色土 酸化鉄粒をやや多く含む。

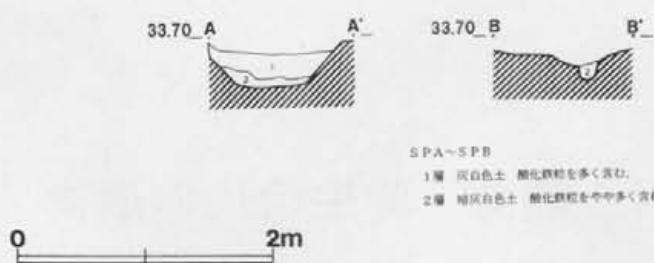
S.PM

- 1層 灰色土 酸化鉄粒を少し含む。
- 2層 灰茶褐色土 白色粒、酸化鉄粒、マンガンを少し含む。
- 3層 灰白色土 白色粒、酸化鉄粒を含む。

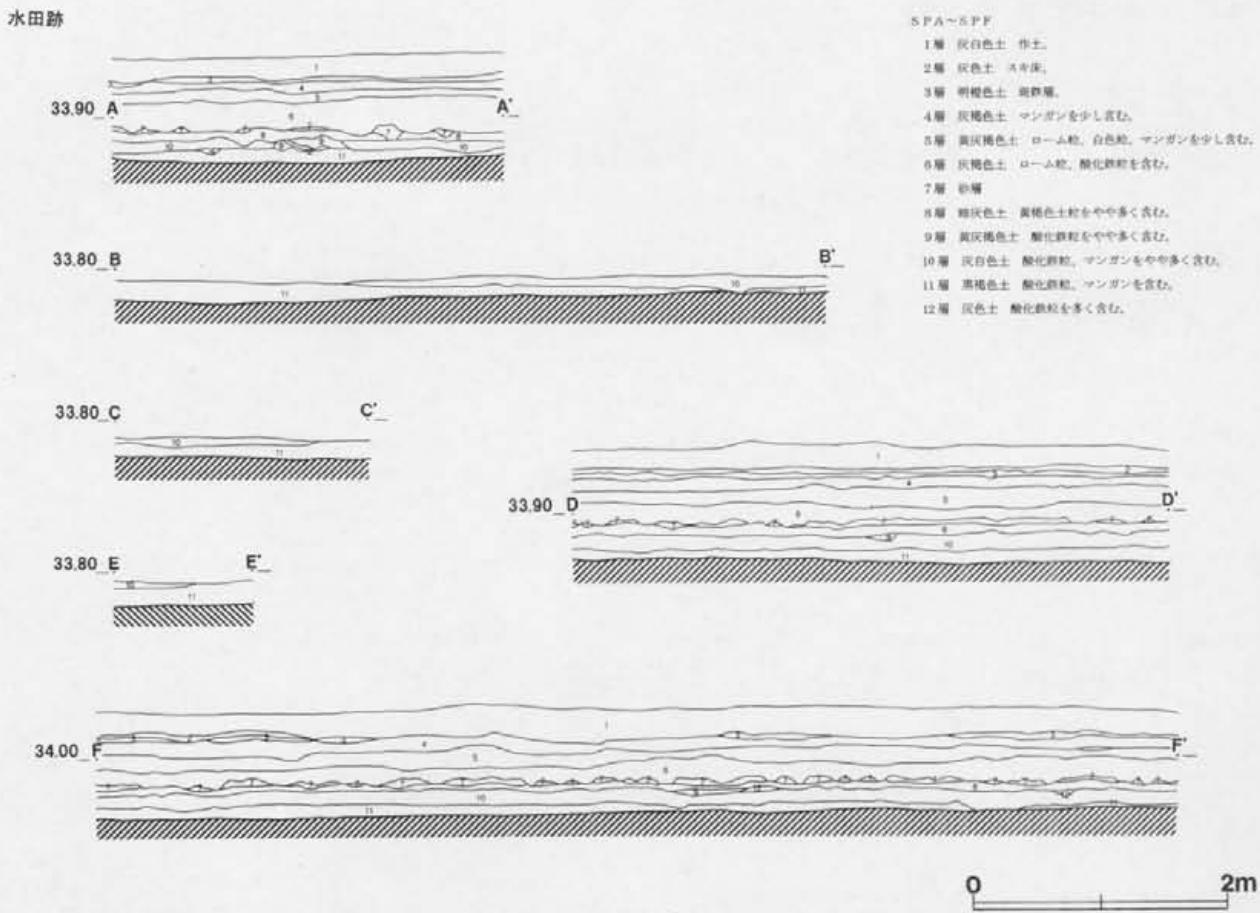
第67・68・71号溝



第70号溝



第11図 溝断面図(3)



第12図 水田跡断面図

### III 繩文・弥生時代の遺物

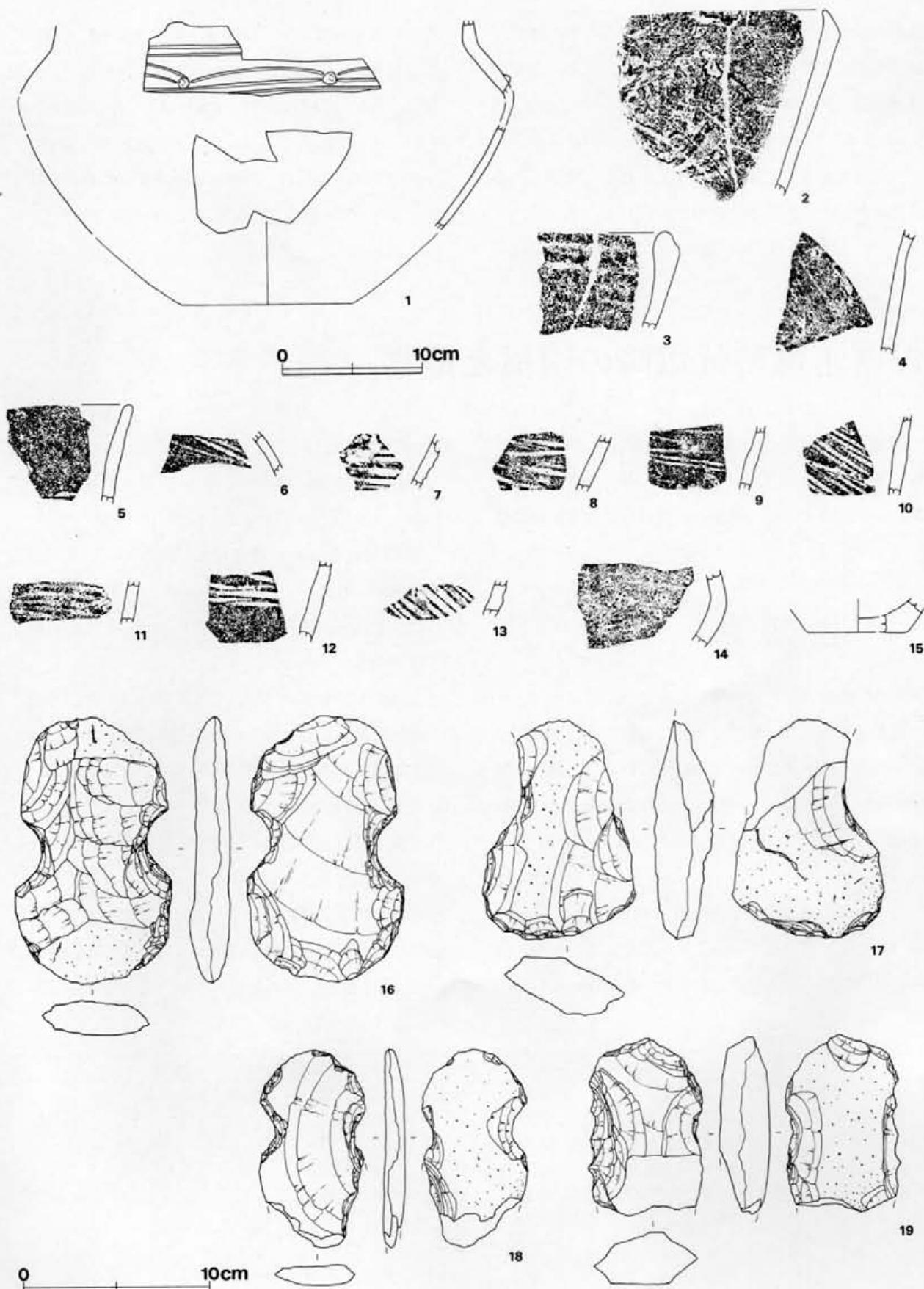
第13図1がC-7グリッドから出土したため、住居等の可能性を考えて精査を行ったところ、ピットは検出されたが、炉跡等は検出されず、住居跡と認定することはできなかった。調査では、この地点をSX1と仮称した。また、弥生土器はいずれも小破片であるが、D-10グリッド付近に多く分布する傾向が認められた。

第13図1～4は縄文土器である。全て後期後半のものと思われる。1は径1cm未満の貼瘤が施され、それを連結する直線、弧線の沈線が横位に施される。器面は摩耗が激しく、縄文は観察できなかった。C-7グリッドから出土した。2、3は口唇がやや肥厚する口縁部である。2は条線が斜位に施される。D-3グリッド出土である。3は無文である。口唇上がやや凹む。

F-12グリッド出土である。4は無文の胴部資料である。上部がわずかに外反する。D-3グリッド出土である。

5～15は弥生土器である。5は壺形土器の口縁部である。下部に沈線が認められる。第15・16号溝から出土した。6～13は多条の沈線が施されたものである。6は壺形土器の肩部と思われる。D-10グリッドから出土した。7、8は第1号溝出土である。9、10、12はD-10グリッド出土である。13は第1号溝出土である。14はD-3グリッド出土である。15は底部資料である。推定底径5.3cmを測る。F-12グリッド出土である。

16～19は打製石斧である。16～18は分銅形、19は短



第13図 繩文・弥生時代の遺物

冊形を呈する。16は刃部付近、基部付近のそれぞれ片面に自然面を残し、縁辺から調整が行われる。抉部の調整は比較的丁寧である。砂岩製で、長さ14.2cm、幅8.3cm、厚さ2.1cmを測る。C-7グリッドから出土した。17は基部を欠損する。両面に自然面を残す。片面は刃部付近と抉部のみに調整が行われる。ホルンフェルス製で、残存長11.7cm、幅8.2cm、厚さ3.2cmを測る。

第1号溝出土である。18は刃部を欠損する。片面に自然面を残し、縁辺にのみ細かい調整が行われる。砂岩製で、残存長10.6cm、幅5.6cm、厚さ1.2cmを測る。F-11グリッド出土である。19は刃部付近を欠損する。片面は自然面を残し、周縁部のみ調整される。ホルンフェルス製で、残存長9.5cm、幅6.1cm、厚さ2.8cmを測る。第1号溝出土である。

## IV 古墳時代以降の遺構と遺物

検出された遺構は、住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟、柵列跡1基、溝83条、道路跡1条、井戸3基、土壙2基、水田跡等である。住居跡、掘立柱建物跡の時期は奈良・平安時代と思われる。

### 1 住居跡

#### 第1号住居跡（第14図、第2表）

調査区東部、H-15グリッドに位置する。平面形は長方形で、南西部を第3号溝に切られる。規模は長軸約3.4m、短軸3.3mを測る。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは12cmを測る。主軸方向は、N-67°-Eである。

カマドは北東壁のやや南寄りに構築される。当初、袖の基底部が残存していることを想定していたが、断面観察の結果、確認できなかった。燃焼部は幅54cmで

50cm竪穴から張り出す。張り出し部の底面は、床面より7cm低い。周辺には南側を中心に、炭化物が分布していた。

壁溝は幅12~17cm、床面からの深さ5cmで、北西部のみで確認された。

ピットは4基検出された。各ピットの床面からの深さは次の通りである。

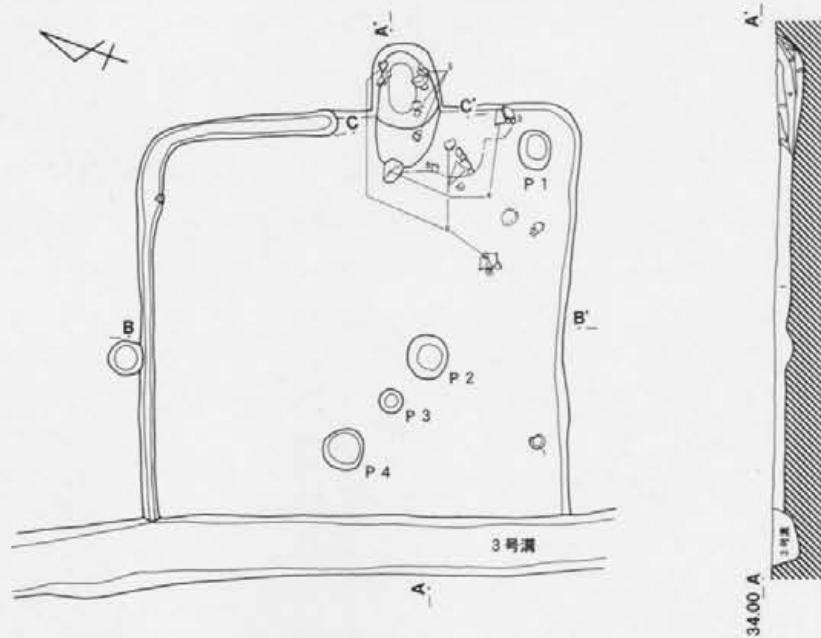
P 1 … 9 cm、P 2 … 19 cm、P 3 … 7 cm、P 4 … 4 cm。

遺物はほとんどがカマド周辺から出土した。1~6は土師器である。1~3は壺である。1は口唇部の一部に煤が付着する。3は口縁部がわずかに外反する。4は鉢である。半球状の器形で、外面はヘラ削り、外面の口縁部付近と内面はナデにより調整される。5は台付甕、6は甕である。7~9は須恵器である。7は蓋のつまみ部、8は壺の底部、9は甕である。

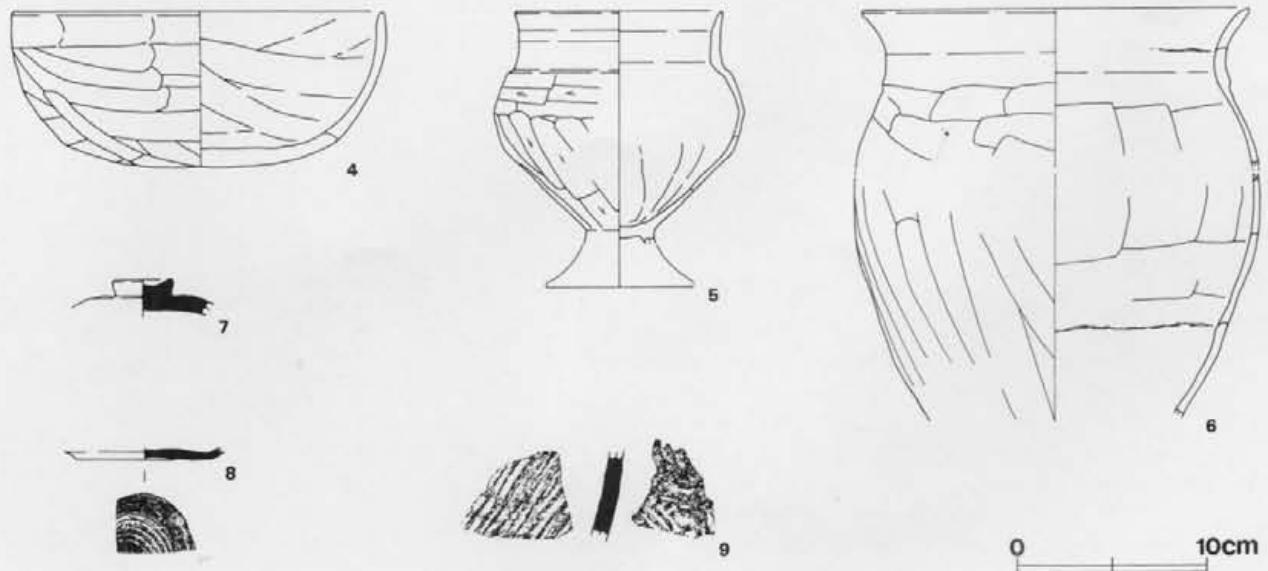
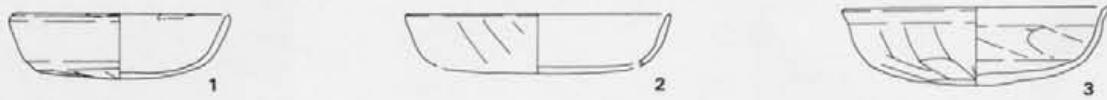
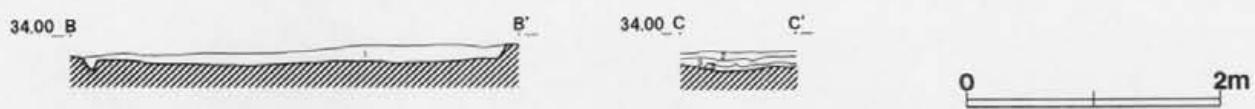
出土遺物から、8世紀代の所産と考えられる。

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	H	壺	11.5	3.4		ABCDE	普	橙	85%	口縁部に煤が付着。
2	H	壺	(14.0)	(3.1)		ABCDEH	普	橙		
3	H	壺	(14.0)	4.1		ABCDE	普	橙	20%	
4	H	鉢	19.6	8.3		ABCE	普	橙	80%	
5	H	台付甕	(11.0)	(14.5)		ABCEH	普	赤褐	40%	
6	H	甕	(20.4)			ABCEH	普	明橙	25%	
7	S	蓋				ACDFH	良	灰	15%	
8	S	壺			(7.0)	ACGH	良	灰	15%	底面の周縁にヘラ調整。
9	S	甕				ACGH	良	灰		

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表



第1号住居跡  
 1層 線灰褐色土 河化粒、燒土粒。白色粒を含む。  
 2層 線灰褐色土 ローム粒をやや多く含む。  
 3層 灰色土 燃土粒を少し含む。  
 4層 線灰褐色土 燃土粒を少し含む。  
 5層 灰色土 灰層、河化粒、燒土粒を含む。  
 6層 灰褐色土 燃土粒をやや多く含む。河化粒を少し含む。  
 7層 油褐色土 燃土粒を多く含む。  
 8層 灰褐色土 ローム粒。燃土粒を含む。



第14図 第1号住居跡及び出土遺物

## 2 掘立柱建物跡

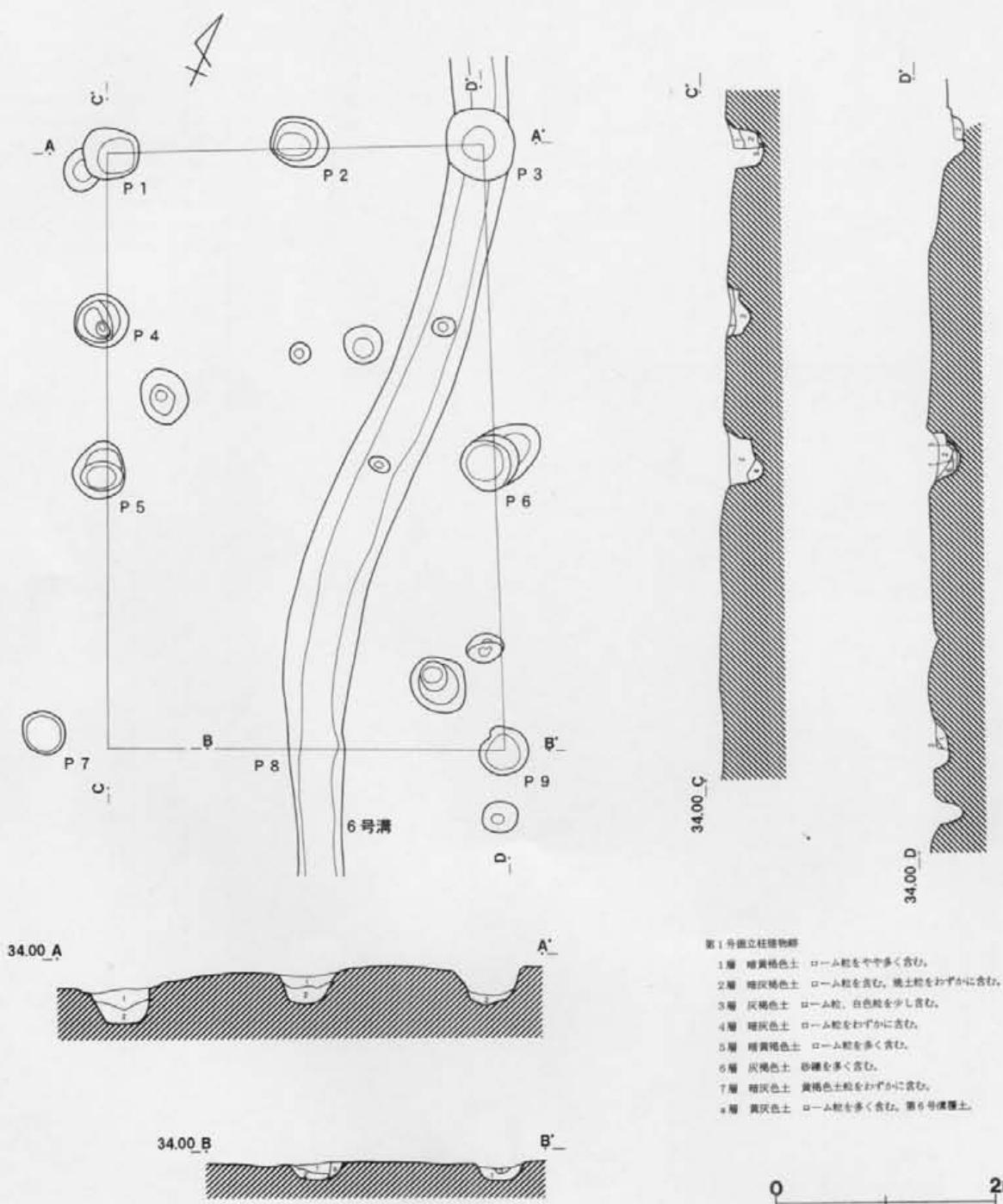
第1号掘立柱建物跡（第15図）

調査区東部、F-14・-15、G-14・-15グリッドに位置する。桁行2間（5.58m）×梁行2間（3.42m）

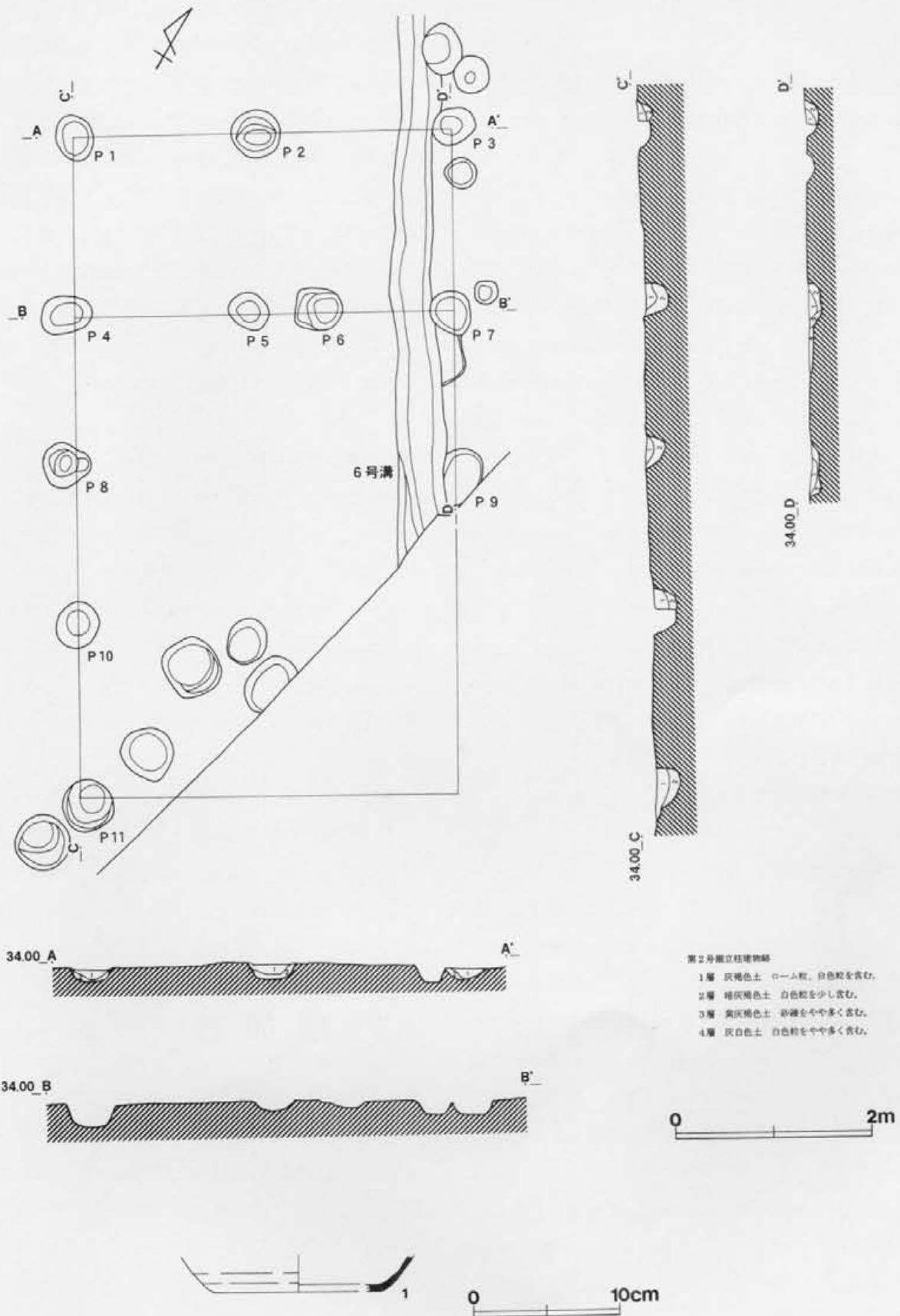
の側柱建物である。柱間間隔は、P1-P2-P3が1.68m-1.74m、P1-P4-P5が1.56m-1.44m、P3-P6-P9が2.94m-2.64mを測る。主軸方向はN-23°-Wである。P3は第6号溝を切る。

各ピットの確認面からの深さは次の通りである。

P1…34cm、P2…29cm、P3…36cm、P4…22cm、



第15図 第1号掘立柱建物跡



第16図 第2号掘立柱建物跡及び出土遺物

P 5 … 35cm, P 6 … 26cm, P 7 … 11cm, P 8 … 14cm, P 9 … 14cm。

図示できる遺物は出土しなかったが、遺構の時期は、奈良・平安時代と思われる。

#### 第2号掘立柱建物跡（第16図）

調査区東部、H-15・-16、I-15グリッドに位置する。桁行4間(6.78m)×梁行2間(3.87m)の側柱建物である。北側に庇が付く形態の可能性もある。柱間間隔は、P 1-P 2-P 3が1.86m-2.01m、P 1-P 4-P 8-P 10-P 11が1.86m-1.50m-1.68m-1.74m、P 3-P 7-P 9が1.86m-1.86mを測る。主軸方向はN-30°-Wである。

各ピットの確認面からの深さは、次の通りである。P 1 … 15cm, P 2 … 16cm, P 3 … 16cm, P 4 … 24cm, P 5 … 11cm, P 6 … 9cm, P 7 … 16cm, P 8 … 25cm, P 9 … 8cm, P 10 … 27cm, P 11 … 23cm。

遺物は1点が図示できた。1はP 9から出土した須恵器碗である。推定底径11.4cmを測り、焼成は普通、色調は灰白色を呈し、胎土に白・黒色粒、石英、白色針状物質を含む。残存率は10%である。

遺構の時期は、奈良・平安時代と思われる。

#### 第3号掘立柱建物跡（第17～18図）

調査区東部、G-15・-16グリッドに位置する。桁行3間(6.00m)×梁行2間(4.80m)の側柱建物である。柱間間隔は、P 1-P 2-P 3が1.92m-1.68m、P 1-P 4-P 6が2.58m-2.22m、P 6-P 7-P 8-P 9が1.98m-2.04m-1.98mを測る。主軸方向はN-30°-Wである。P 8が第4号掘立柱建物跡P 3に切られ、第4号掘立柱建物跡に先行することが分かる。

各ピットの確認面からの深さは、次の通りである。P 1 … 23cm, P 2 … 18cm, P 3 … 26cm, P 4 … 16cm, P 5 … 16cm, P 6 … 13cm, P 7 … 13cm, P 8 … 16cm, P 9 … 19cm。

遺物は3点が図示できた。1はP 9から出土した土

師器坏である。推定口径12.2cm、推定器高2.2cmを測り、焼成は普通、色調は橙色を呈し、胎土に白・赤・黒色粒、角閃石を含む。残存率は15%である。2はP 3から出土した、土師器坏である。推定口径12.8cm、推定器高3.1cmを測り、焼成は普通、色調は橙色を呈し、胎土に白・赤・黒色粒、角閃石、砂礫を含む。残存率は20%である。3はP 9から出土した須恵器甕である。外面は擬格子状、内面は青海波文の当て具が用いられる。焼成は良好、色調は青灰色を呈し、胎土に白・赤・黒色粒を含む。

遺構の時期は奈良時代と思われる。

#### 第4号掘立柱建物跡（第17～18図）

調査区東部、G-15グリッドに位置する。桁行2間(6.00m)×梁行2間(4.26m)の側柱建物である。柱間間隔は、P 1-P 2-P 3が3.00m-3.00m、P 6-P 7-P 8が2.88m-3.00m、P 1-P 4-P 6が2.10m-2.16m、P 3-P 5-P 8が2.10m-2.16mを測る。主軸方向はN-30°-Wである。P 3が第3号掘立柱建物跡P 8を切る。また、P 6とP 8が第6号溝を切る。

各ピットの確認面からの深さは、次の通りである。

P 1 … 18cm, P 2 … 16cm, P 3 … 11cm, P 4 … 22cm, P 5 … 16cm, P 6 … 25cm, P 7 … 23cm, P 8 … 14cm。

図示できる遺物は出土しなかったが、遺構の時期は、奈良・平安時代と思われる。

### 3 柵列跡

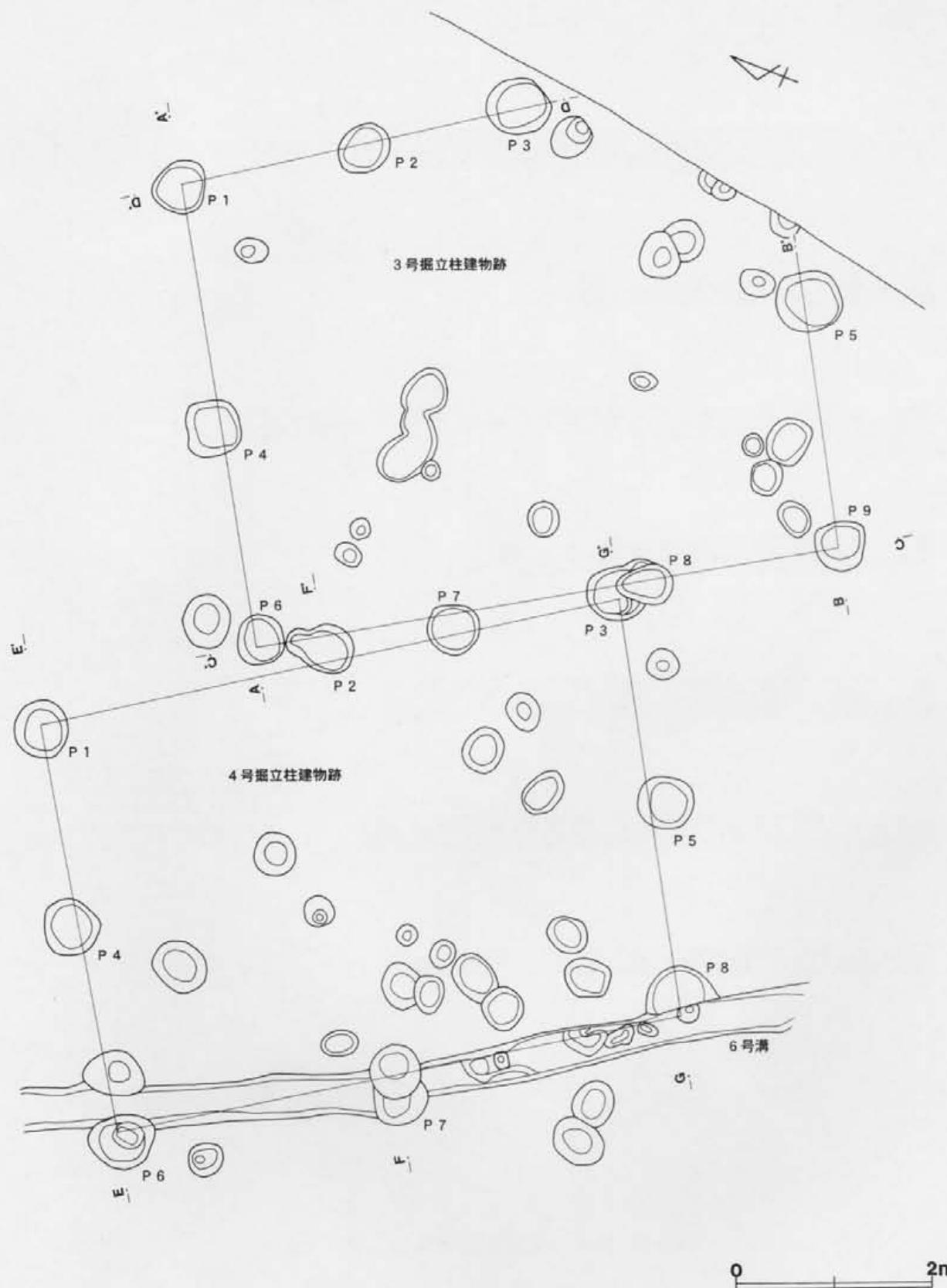
#### 第1号柵列跡（第19図）

調査区東部、F-13・14グリッドに位置する。4基の柱穴が東西に5.70m並ぶ。柱間間隔は、西から1.56m-2.34m-1.80mを測る。主軸方向は、N-72°-Wである。

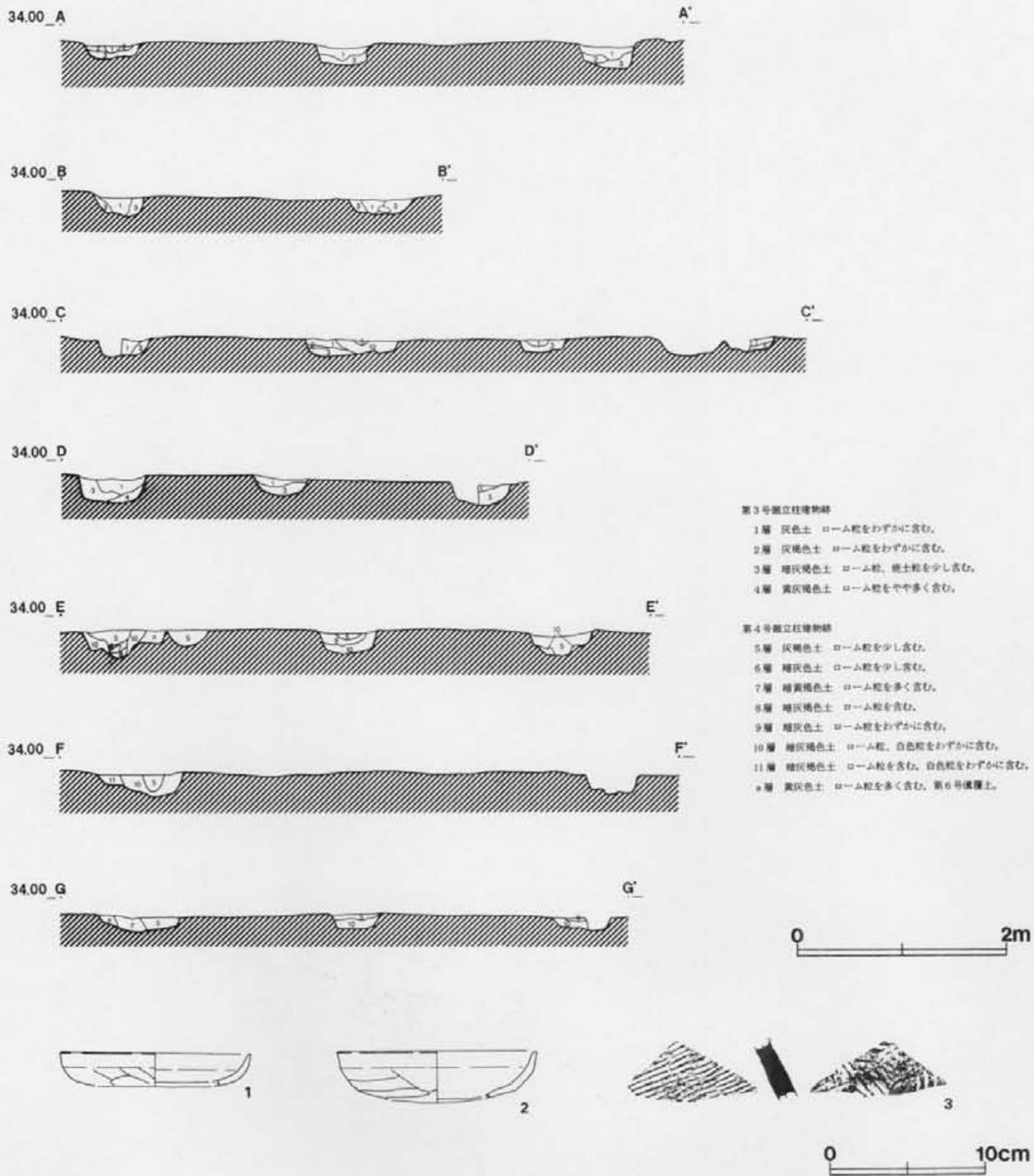
各ピットの確認面からの深さは、次の通りである。

P 1 … 11cm, P 2 … 16cm, P 3 … 21cm, P 4 … 32cm。

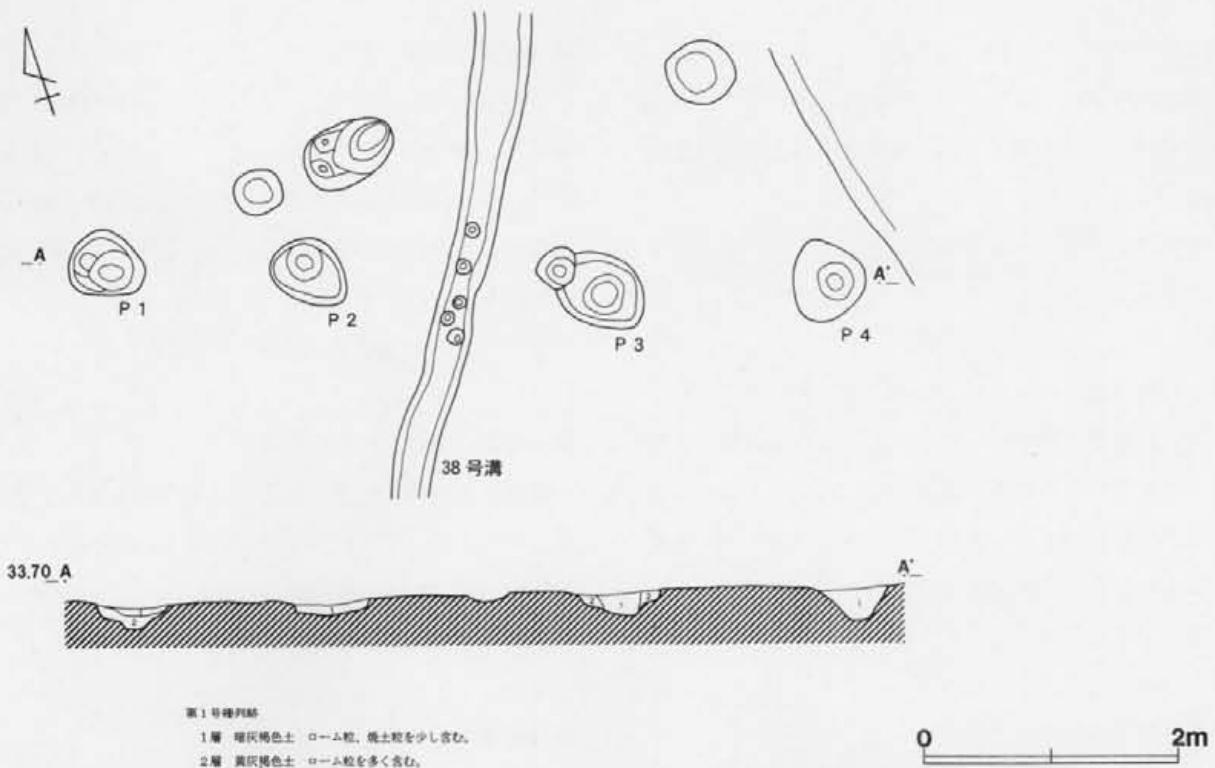
図示できる遺物は出土しなかった。



第17図 第3・4号掘立柱建物跡(1)



第18図 第3・4号掘立柱建物跡(2)及び出土遺物



第19図 第1号柵列跡

## 4 溝

83条が検出された。しかし、別の番号を付したもので、本来は同一の溝もあることから、実数は76条程度である。遺構の時期は、奈良・平安時代から近世まで及ぶ。

### 第1号溝（第4～7・9・21図、第3表）

調査区北壁に沿って、N-73°-Wの方向に走る。重複或いは並行する溝に先行するものと思われる。幅約160cmを測り、断面形は逆台形を呈する。一部では、中段にテラスを有する。確認面からの深さは66～114cm、底面の標高は約32.8mを測る。覆土は、一部で噴砂や地割れの影響を受けており、地震が起きたと考えられる818年或いは878年の時点で既に埋没していたと考えられる。

遺物は4点の他、第19号溝との重複部分から10点が図示できた。

遺構の時期は奈良・平安時代と思われる。

### 第2号溝（第6～7・10図）

調査区東部に位置し、第1号溝から南に発する。第1号溝とほぼ直交し、方向はN-6°-Eである。幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。北部では、底面に工具痕が観察できた。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第3号溝（第6～7・10図）

調査区東部に位置し、第38号溝を切り、第4号溝に切られる。方向はN-25°-Wで、幅約60cm、確認面からの深さは10～20cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第4号溝（第6～7・10・21図、第3表）

調査区東部に位置し、第3・6・38号溝を切る。方向はN-25°-Wで、幅約90cm、確認面からの深さは15～25cmを測る。

遺物は4点が図示できた。

#### 第5号溝（第7・21図、第3表）

調査区東部に位置し、第4号溝から分岐する。方向はN-18°-Eで、幅約40cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

遺物は、第4・5号溝の分岐点付近から出土した2点が図示できた。

#### 第6号溝（第6～7・10・21図、第3表）

調査区東部に位置し、第1・4号掘立柱建物跡、第3・4号溝に切られる。北部では、底面に工具痕が観察できた。方向はN-30°-Wで、北部は曲がる。幅約40cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

遺物は1点が図示できた。

#### 第7号溝（第7図）

調査区南東部に位置し、第43・45号溝と重複する。方向はN-10°-Wで、南部はほぼ真南に走る。幅約50cm、確認面からの深さは約20cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第8号溝（第6～7図）

調査区東部に位置する。第11号溝と同一のものの可能性がある。方向はN-25°-Wで、幅約50cm、確認面からの深さは約15cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第9号溝（第6・10・21図、第3表）

調査区東部に位置し、第11・29号溝と重複する。また、第1号溝を切る。方向はほぼ真北から、北部でN-65°-Wに曲がる。幅約70～90cm、確認面からの深さは北部で約70cm、南部で約15cmを測る。第1号溝を越えて北側は、第19号溝とした部分に含まれると思われ、第19号溝南西の立ち上がりは、第9号溝の立ち上がりであると考えられる。

遺物は1点が図示できた。

#### 第10号溝（第6・10図）

調査区中央部に位置し、第13・46・47・79号溝と重複する。また、第21号溝を切る。方向はほぼ真北で、幅約40cm、確認面からの深さは約10cmを測る。北部では、底面に工具痕が観察でき、また幅広になる部分が認められた。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第11号溝（第6・21図、第3表）

調査区中央部に位置し、第9・78号溝と重複する。第8号溝と同一のものの可能性がある。方向はN-50°-Wで、幅約30cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

遺物は3点が図示できた。

#### 第12号溝（第4図）

調査区西部に位置し、第51号溝と重複する。方向はN-30°-Eで、幅約30cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第13号溝（第6図）

調査区中央部に位置し、第10・11・47・78号溝と重複する。方向はN-60°-Wで、幅約100cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第14号溝（第5図）

調査区中央部に位置する。方向はN-15°-Eで、幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第15号溝（第5～6・10図）

調査区中央部に位置し、第21・35・76号溝を切る。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第16号溝（第5～6・10図）

調査区中央部に位置し、第21・35号溝を切る。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第17号溝（第6・20～21図、第3表）

調査区中央部に位置し、北部は幅広となり第1・9号溝等の上部に構築される。部分的に硬化部分が認められたため、道路跡の可能性もある。上面からは浅間B軽石が検出されたが、出土遺物から、遺構の時期は近世と考えられる。方向は真北へと曲がりながら北上し、幅約80cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

遺物は、陶磁器を中心に6点が図示できた。

#### 第18号溝（第5～6図）

調査区北部に位置する。方向はN-80°-Wで、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第19号溝（第6・9・21図、第3表）

調査区北部に位置し、第1号溝を切る。方向はN-70°-Wで、確認面からの深さは約30cmを測る。土層断面から幾つかの溝の複合体の可能性があり、C-8・-9グリッドで認められる南西の立ち上がりは、第9号溝の立ち上がりであると思われる。

遺物は6点が図示できた。

#### 第20号溝（第5～6・10図）

調査区中央部に位置し、第21号溝と重複する。方向はほぼ真北で、幅約60cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第21号溝（第5～6・10図）

調査区中央部に位置し、第15・16・20・23・24・27号溝と重複する。第26・37号溝と同一のものの可能性

がある。方向はN-30°-Wで、幅約25cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第22号溝（第4・11図）

調査区西部に位置する。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第23号溝（第5～6図）

調査区中央部に位置し、第25～27号溝と重複する。第24号溝と同一のものの可能性がある。方向はN-15°-Eで、幅約30cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第24号溝（第5～6・10図）

調査区北部に位置し、第21・25～27号溝と重複する。第23号溝と同一のものの可能性がある。方向はN-15°-Eで、幅約30cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第25号溝（第5～6・10図）

調査区中央部に位置し、第21・23・24・26号溝と重複する。第27号溝と同一のものの可能性がある。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第26号溝（第5～6・10・20図）

調査区中央部に位置し、第1・23～25・27号溝と重複する。第21・37号溝と同一の可能性がある。方向はN-30°-Wで、幅約30cm、確認面からの深さは約15cmを測る。第1号溝と重複する部分では幅広になり、第1号溝覆土を切る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第27号溝（第5～6図）

調査区中央部に位置し、第21・23・24・26号溝と重複する。第25号溝と同一のもの可能性がある。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第28号溝（第5図）

調査区中央部に位置し、第71号溝と重複する。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第29号溝（第6・10図）

調査区東部に位置し、第9号溝と重複する。方向はN-30°-Wで、幅約40cm、確認面からの深さは約15cmを測る。底面からは工具痕が観察され、一部で幅100cm、深さ42cmとなる部分が認められる。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第30号溝（第6図）

調査区中央部に位置する。方向はN-55°-Wで、幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第31号溝（第6・10図）

調査区中央部に位置し、第32号溝を切る。方向はN-30°-Wで、北部で西へと曲がる。幅約90cm、確認面からの深さは約15cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第32号溝（第6・10図）

調査区中央部に位置し、第31号溝に切られる。方向はN-30°-Wで、北部で西へと曲がる。幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第33号溝（第5～6・10図）

調査区中央部に位置し、第20・27号溝と重複する。方向はほぼ東西方向で、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第34号溝（第5～6・10図）

調査区中央部に位置し、第20・27・33号溝と重複する。方向はN-45°-Eで、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第35号溝（第5～6・10図）

調査区中央部に位置し、第15・16号溝に切られる。方向はN-40°-Wで、幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第36号溝（第4～6・9・22図、第3表）

調査区北部に位置し、第1～3号井戸を伴う可能性が考えられる。方向はN-70°-Wで、幅約110cm、確認面からの深さは約40cmを測る。

遺物は1点が図示できた。遺構の時期は中世と考えられる。

### 第37号溝（第6図）

調査区中央部に位置する。第21・26号溝と同一のものと思われる。G-11グリッドで幅広になる部分が認められる。方向はN-25°-Wで、幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第38号溝（第6～7・10図）

調査区東部に位置し、第6号溝から分岐する。また、第3・4号溝に切られる。一部で、底面に工具痕が観察された。方向はN-25°-Eで、幅約40cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第39号溝（第6～7・22図、第3表）

調査区東部に位置する。方向はほぼ真北で、幅約40cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

遺物は1点が図示できた。

#### 第40号溝（第6～7図）

調査区東部に位置する。方向はN-5°-Eで、幅約30cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第41号溝（第6図）

調査区北部に位置する。方向はほぼ東西方向で、幅約70cm、確認面からの深さは約35cmを測る。底面の一部で、工具痕が確認された。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第42号溝（第6・9図）

調査区北部に位置する。方向はN-70°-Wで、確認面からの深さは約45cmを測る。西の先端部では、工具痕のみ確認された。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第43号溝（第7・22図、第3表）

調査区東部に位置し、第7・44号溝と重複する。方向はN-15°-Wで、幅約50cm、確認面からの深さは約15cmを測る。

遺物は1点が図示できた。

#### 第44号溝（第7図）

調査区東部に位置し、第43号溝と重複する。方向はN-15°-Wで、幅約40cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第45号溝（第7図）

調査区東部に位置し、第7号溝と重複する。方向はN-10°-Wで、幅約50cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第46号溝（第6図）

調査区中央部に位置し、第10・11号溝と重複する。方向はN-60°-Wで、幅約50cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第47号溝（第6図）

調査区中央部に位置し、第10・11号溝と重複する。方向はN-60°-Wで、幅約30cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第48号溝（第4・11図）

調査区西部に位置し、第49号溝を切る。また、第50号溝と直交する。方向はN-85°-Wで、幅約30cm、確認面からの深さは約20cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第49号溝（第4・11図）

調査区西部に位置し、第48・55～59号溝に切られる。方向はN-40°-Wで、幅約70cm、確認面からの深さは約30cmを測る。底面から、工具痕が多く確認された。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第50号溝（第4図）

調査区西部に位置し、第48号溝と直交する。方向はN-10°-Wで、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第51号溝（第4図）

調査区北部に位置し、第1・12・55～61号溝と重複する。第52号溝と同一のものの可能性がある。方向はN-70°-Wで、幅約30cm、確認面からの深さは約15cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第52号溝（第5・22図、第3表）

調査区北部に位置し、第1・53・54号溝と重複する。第51号溝と同一のものの可能性がある。方向はN-70°-Wで、幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。遺物は1点が図示できた。

#### 第58号溝（第4・11図）

調査区西部に位置し、第49号溝を切る。方向はほぼ真北で、幅約20cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第59号溝（第4・11図）

調査区西部に位置し、第49・51・60・61号溝と重複する。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第53号溝（第4図）

調査区北部に位置し、第1・52号溝と重複する。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約15cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第60号溝（第4図）

調査区西部に位置し、第51・59・61号溝と重複する。方向はほぼ真北で、幅約20cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第54号溝（第5図）

調査区北部に位置し、第1・36・52号溝と重複する。方向はN-40°-Eで、幅約30cm、確認面からの深さは約20cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第61号溝（第4図）

調査区西部に位置し、第51・59・60号溝と重複する。方向はN-30°-Wで、幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第55号溝（第4・11図）

調査区西部に位置し、第49号溝を切る。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第62号溝（第4～5図）

調査区西部に位置する。方向はN-25°-Wで、幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第56号溝（第4・11図）

調査区西部に位置し、第49号溝を切る。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第63号溝（第4～5図）

調査区西部に位置し、第49号溝と重複する。方向はほぼ真北で、北部でやや西に曲がる。幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第57号溝（第4・11図）

調査区西部に位置し、第49号溝を切る。方向はほぼ

#### 第64号溝（第5・11図）

調査区西部に位置し、第49号溝を切る。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。  
図示できる遺物は出土しなかった。

面からの深さは約10cmを測る。また、深さ40cmと一段深くなる部分も認められる。

図示できる遺物は出土しなかったが、覆土上層から浅間A軽石が検出されたため、近世の所産と考えられる。

#### 第65号溝（第5・11図）

調査区西部に位置し、第49号溝を切る。また、第66号溝と重複する。方向はほぼ真北で、幅約20cm、確認面からの深さは約10cmを測る。  
図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第71号溝（第5～6・8・11図）

調査区中央部に位置し、第27・28・68号溝と重複する。第67号溝と同一のものと思われる。方向はN-40°-Wで、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第66号溝（第5・11図）

調査区西部に位置し、第65号溝と重複する。方向はN-15°-Eで、幅約20cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第72号溝（第8図）

調査区南部に位置する。方向はほぼ真北で、幅約25cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第67号溝（第5・11図）

調査区中央部に位置し、第68号溝に切られる。方向はほぼ真北で、北部ではN-40°-Eに曲がる。第71号溝と同一のものの可能性がある。幅約25cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第73号溝（第8図）

調査区南部に位置し、第75号溝と重複する。方向はほぼ真北で、幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第68号溝（第5・11図）

調査区中央部に位置し、第67号溝を切る。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第74号溝（第8図）

調査区南部に位置し、第80号溝と重複する。方向はN-40°-Eで、幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第69号溝（第5・8図）

調査区中央部に位置する。方向はほぼ真北で、南部では西に曲がる。幅約20cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第75号溝（第8図）

調査区南部に位置し、第68・73・80号溝と重複する。方向はほぼ東西方向で、幅約35cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

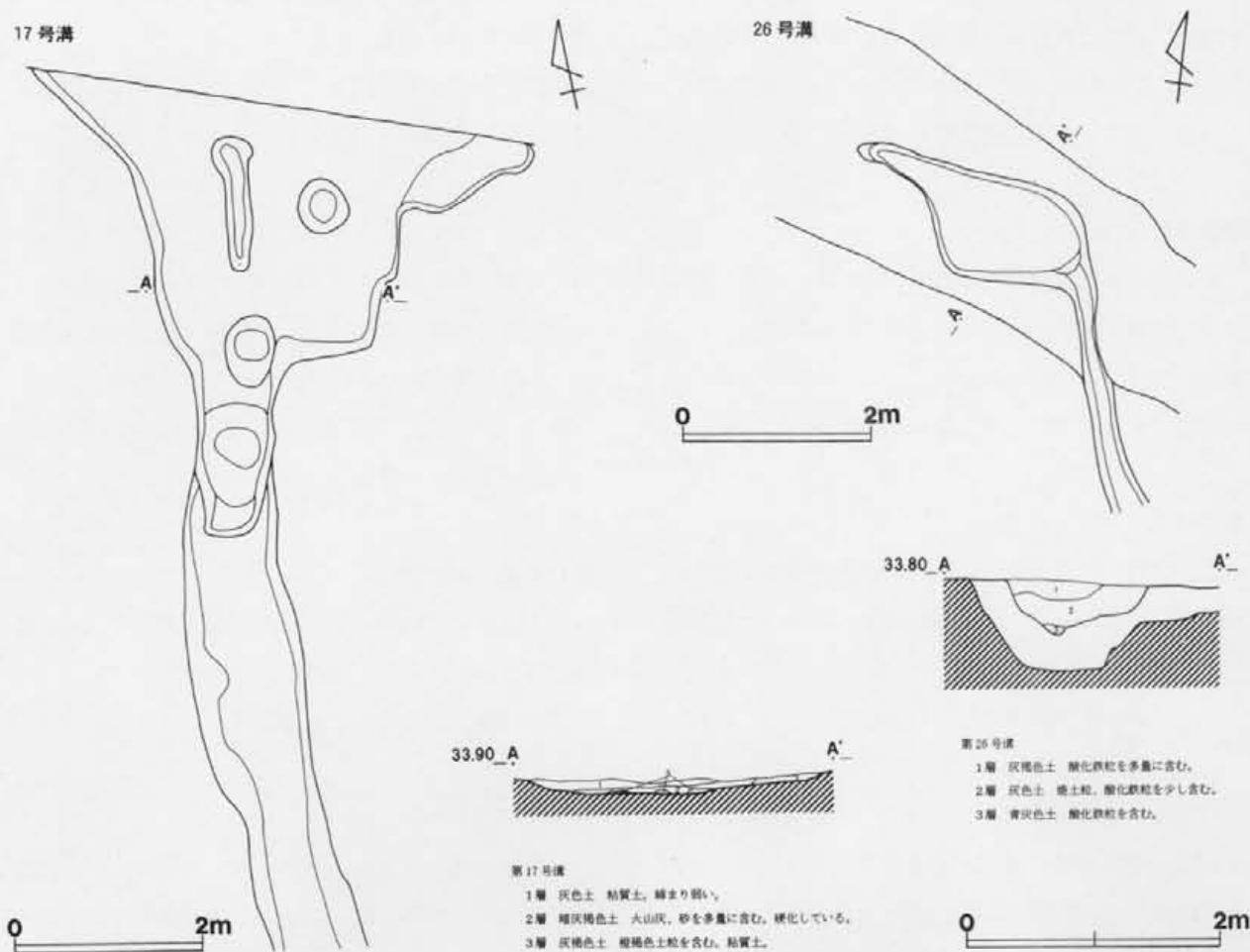
図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第70号溝（第4・11図）

調査区西部に位置する。方向はN-10°-Eで、確認

#### 第76号溝（第8図）

調査区南部に位置し、第10・15・77号溝と重複する。



第20図 第17・26号溝

方向はN-35°-Wで、幅約25cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第77号溝（第8図）

調査区南部に位置し、第10・76号溝と重複する。方向はN-15°-Wで、幅約25cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第78号溝（第6・10図）

調査区中央部に位置し、第11号溝と重複する。方向はN-15°-Wで、幅約50cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第79号溝（第6・10・22図、第3表）

調査区中央部に位置し、第10号溝に切られる。方向はN-15°-Wで、幅約30cm、確認面からの深さは約15cmを測る。

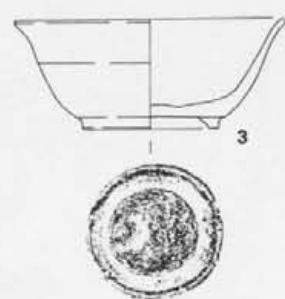
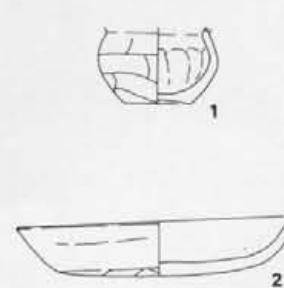
図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第80号溝（第8図）

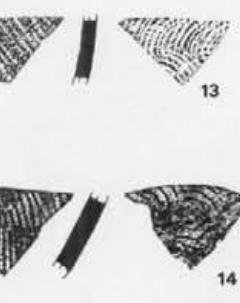
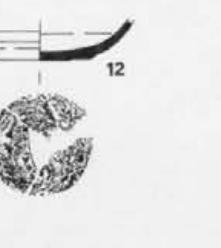
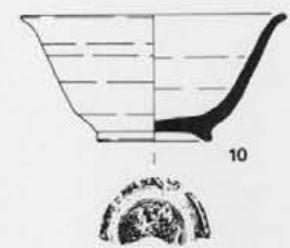
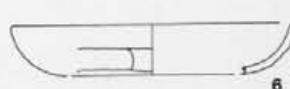
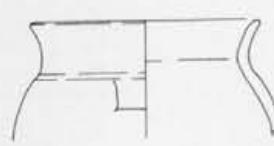
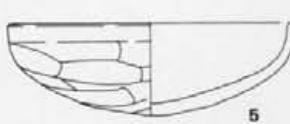
調査区南部に位置し、第74・75号溝と重複する。方向はN-10°-Wで、幅約60cm、確認面からの深さは約10cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

## 1号溝



## 1・19号溝



## 4号溝



16



17



## 4・5号溝



19

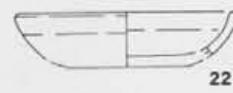


20

## 6号溝



## 9号溝



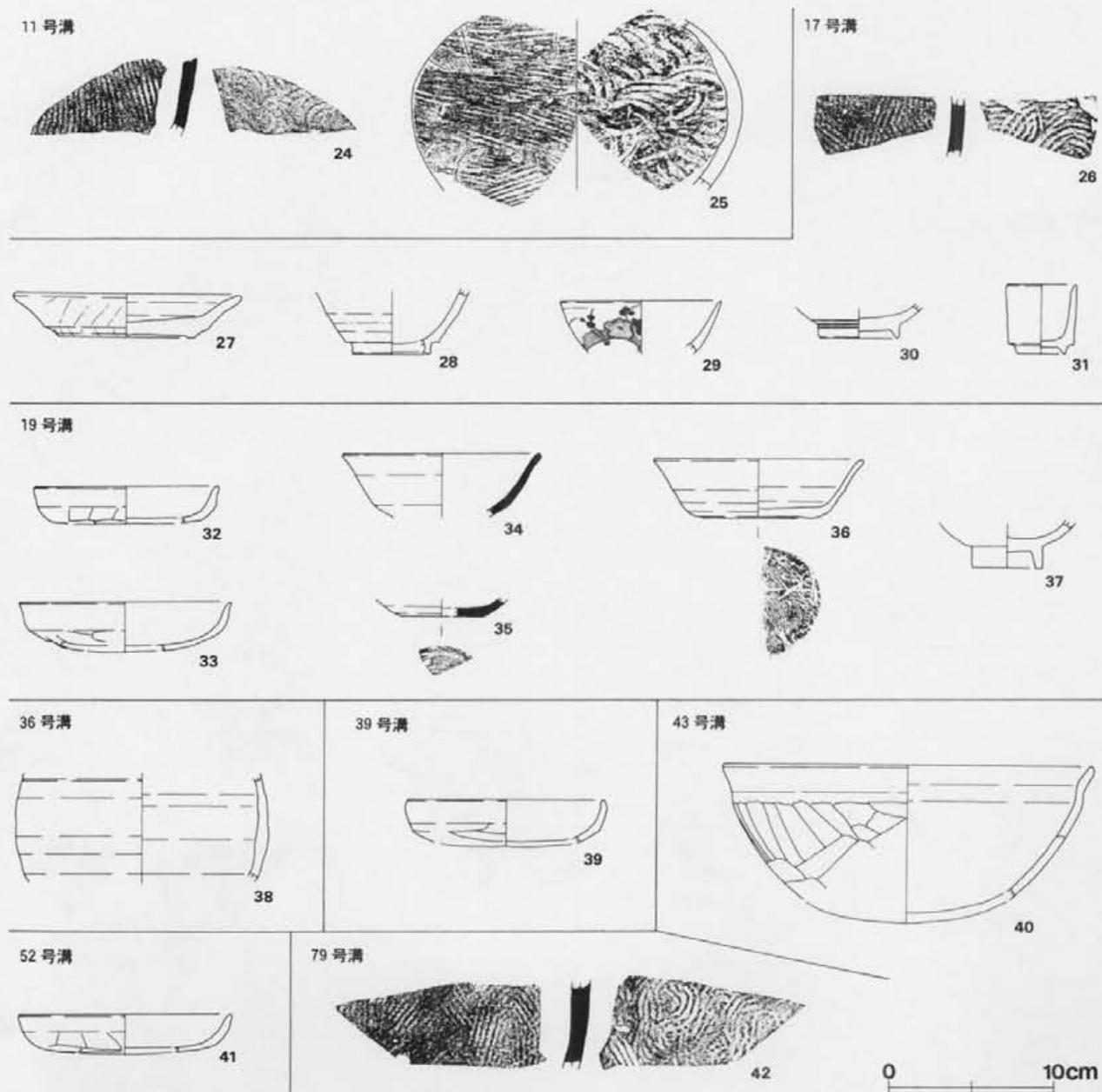
22

## 11号溝



10cm

第21図 溝出土遺物(1)



第22図 溝出土遺物(2)

#### 第81号溝（第4～5図）

調査区西部に位置する。方向はほぼ真北で、幅約30cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第82号溝（第4・11図）

調査区西部に位置し、第58号溝を切る。方向はほぼ真北で、幅約20cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

#### 第83号溝（第8図）

調査区西部に位置し、第68号溝を重複する。方向はN-45°-Eで、幅約30cm、確認面からの深さは約5cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	H	小型甕			3.5	ABCDE	普	橙	75%	第1号溝出土。
2	H	坏	14.9	2.9		ABCDEH	普	明橙	90%	第1号溝出土。
3	HS	高台椀	(14.2)	5.8	7.2	ABC	不良	灰橙	70%	第1号溝出土。
4	H	甕	(15.7)	22.4	6.5	ABCDEH	普	明橙	50%	第1号溝出土
5	H	坏	(15.0)	4.8		ABCD	普	明橙	40%	第1・19号溝出土。
6	H	坏	(14.8)	(2.7)		ABCDE	普	橙	10%	第1・19号溝出土。
7	H	甕	(12.0)			ABCEFH	普	明橙	15%	第1・19号溝出土。
8	H	台付甕			(8.6)	ABCEFH	普	橙	25%	第1・19号溝出土。
9	S	坏	(12.1)	4.0	6.6	ACGH	普	青灰	75%	第1・19号溝出土。
10	S	高台椀	(14.0)	6.6	6.0	AC	不良	灰	40%	第1・19号溝出土。
11	S	高台椀			6.3	ACFH	普	暗灰	15%	第1・19号溝出土。
12	S	坏			5.5	ACFH	良	青灰	25%	第1・19号溝出土。
13	S	甕				All	普	青灰		第1・19号溝出土。
14	S	甕				AC	不良	灰白		第1・19号溝出土。
15	埴輪	円筒				AC	普	明橙		第4号溝出土。
16	S	甕				AC	普	灰		第4号溝出土。
17	S	甕				ACH	良	青灰		第4号溝出土。
18	S	甕				ADH	普	灰		第4号溝出土。
19	S	甕				AEH	良	青灰		第4・5号溝出土。
20	S	甕				AC	不良	灰白		第4・5号溝出土。
21	H	高坏				ABCEH	良	明橙	25%	第6号溝出土。
22	土師質	皿	(11.8)	(2.9)	(6.4)	ABCE	良	淡橙	10%	第9号溝出土。
23	S	甕				AC	不良	灰白		第11号溝出土。
24	S	甕				AC	不良	灰白		第11号溝出土。
25	HS	甕				ABCFH	普	鈍い橙	15%	第11号溝出土。
26	S	甕				AC	不良	灰白		第17号溝出土。
27	陶器	高台皿	(13.8)	2.7	(8.2)	AC	普	灰黄色	40%	第17号溝出土。削り出し高台。灰黄色釉が全面。
28	陶器	天目椀			(4.8)	ABD	普	淡橙	15%	第17号溝出土。黒褐色の釉が内外面にかかる。
29	磁器	高台椀	(9.8)			A	良	白	20%	第17号溝出土。
30	磁器	高台椀			4.8	A	良	白	30%	第17号溝出土。
31	磁器	猪口	2.2	4.2	3.0	A	良	白	50%	第17号溝出土。
32	H	坏	(11.2)	(2.3)		ABCDE	普	橙	15%	第19号溝出土。
33	H	坏	(12.8)	(3.0)		ABCDEH	普	明橙	20%	第19号溝出土。
34	S	坏	(12.0)			ABCH	不良	灰	10%	第19号溝出土。
35	S	坏			(5.0)	ACEFH	普	灰	10%	第19号溝出土。
36	HS	坏	(12.6)	3.6	6.6	ABCFH	良	橙	50%	第19号溝出土。
37	磁器	高台椀			(4.2)	A	良	淡綠	40%	第19号溝出土。
38	陶器	瓶				AB	良	灰褐		第36号溝出土。透明の釉が外面にかかる。
39	H	坏	(11.8)	(2.8)		ABCD	普	明橙	25%	第39号溝出土。
40	H	鉢	(22.4)	(9.5)		ABDEH	普	橙	40%	第40号溝出土。
41	H	坏	(13.0)	(2.4)		ABCDE	普	黑褐	10%	第52号溝出土。
42	S	甕				AC	不良	灰白		第79号溝出土。

第3表 溝出土遺物観察表

## 5 道路跡

### 第1号道路跡（第4・24図）

調査区北西部に位置する。硬化部分が認められたため、道路跡とした。上面からは浅間B軽石が検出されたが、出土遺物から、遺構の時期は近世と考えられる。確認面からの深さは約5cmを測る。

遺物は1点図示できた。第24図1は陶器の甕の底部である。内面には黒褐色の釉がかかる。推定底径10.8cmを測り、焼成は普通、色調は淡橙色を呈し、胎土に白・赤色粒、砂礫を含む。近世の所産と考えられる。

## 6 井戸

### 第1号井戸（第23図）

調査区北部、C-9グリッドに位置する。第36号溝中に検出され、溝に伴う可能性が考えられる。長径0.68m、短径0.58mの楕円形で、確認面からの深さは0.97mを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

### 第2号井戸（第23～24図）

調査区北部、B-7グリッドに位置する。第36号溝中に検出され、溝に伴う可能性が考えられる。長径1.10m、短径0.54mの楕円形を呈し、確認面からの深さは1.27mを測る。

遺物は1点図示できた。第24図3は鉢である。推定口径30.6cmを測り、焼成は普通、色調は黒色を呈し、胎土に白・赤・黒色粒、砂礫を含む。残存率は15%である。中世の所産と考えられる。

### 第3号井戸（第23図）

調査区北部、B-7・-8、C-7・-8グリッドに位置する。第36号溝中に検出され、溝に伴う可能性が考えられる。長軸2.34m、短軸0.96mの長方形を呈し、確認面からの深さは0.83mを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。

## 7 土壙

### 第1号土壙（第23～24図）

調査区中央部、E-10・-11グリッドに位置する。第10・11・78号溝を切って構築される。平面形態は楕円形で、長径1.32m、短径0.94m、確認面からの深さは3cmを測る。

遺物は1点図示できた。第24図2は陶器の皿である。高台付近及び底面を除いて淡緑色の釉がかかる。推定口径11.2cm、推定底径5.8cm、器高2.4cmを測り、焼成は良好、色調は淡緑色を呈し、胎土に白・黒色粒を含む。残存率は25%である。近世の所産と考えられる。

### 第2号土壙（第23図）

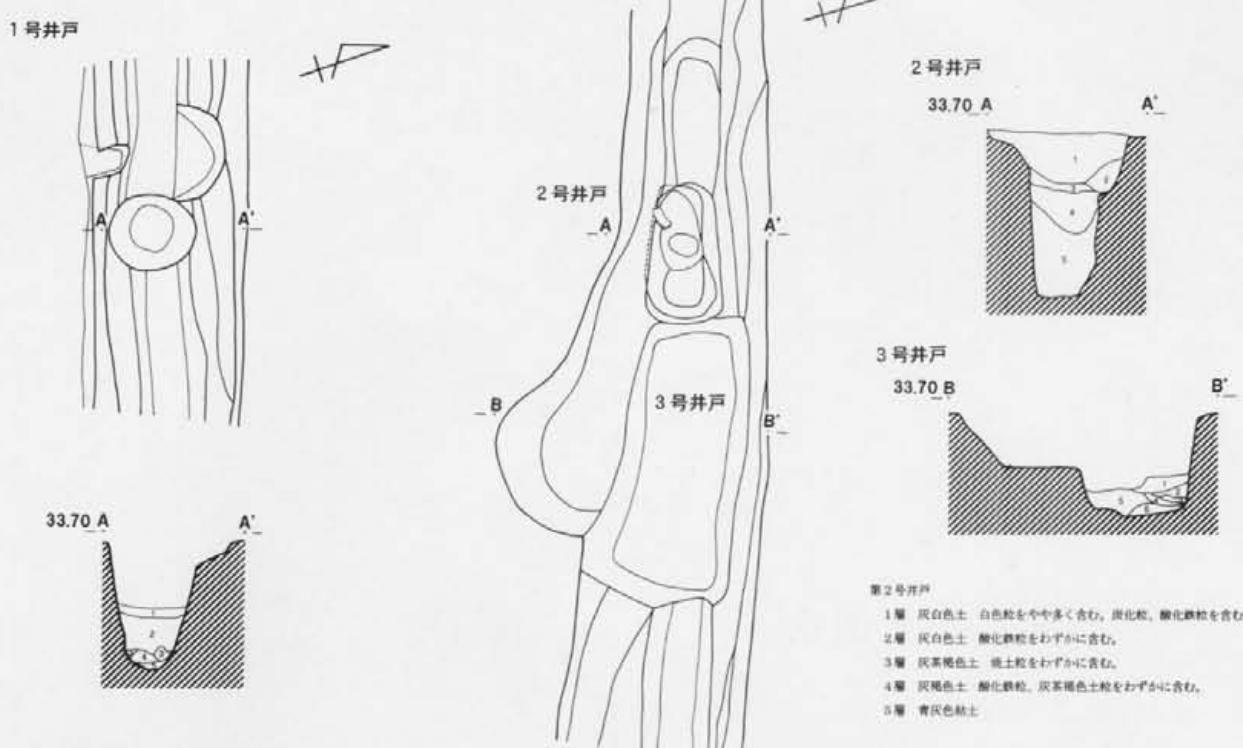
調査区西部、C-6グリッドに位置する。平面形態は長方形で、長径2.60m、短径1.16mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南東部で上半に段を有する。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは1.23mを測る。主軸方向はN-70°-Wである。

図示できる遺物は出土しなかった。

## 8 水田跡

調査区南部に水田跡とみられる土壙が広がっていた（第8・12図参照）。土層断面からは、旧耕作土とみられる8層及び10層が観察され、8層の上面には、全体ではないものの、砂礫が分布していた。砂礫からは、浅間B軽石が多量に検出されたため、8層の上面は、天仁元年（1108年）に噴出した軽石によって覆われた可能性が高い。また、10層に伴う畦畔の痕跡とみられる部分も確認された（SPA-A'の9・12層）。しかし、畦畔の痕跡は平面的には確認できなかった。

なお、南北方向に走る溝は、全て水田跡へ延びていると思われる。



第1号井戸

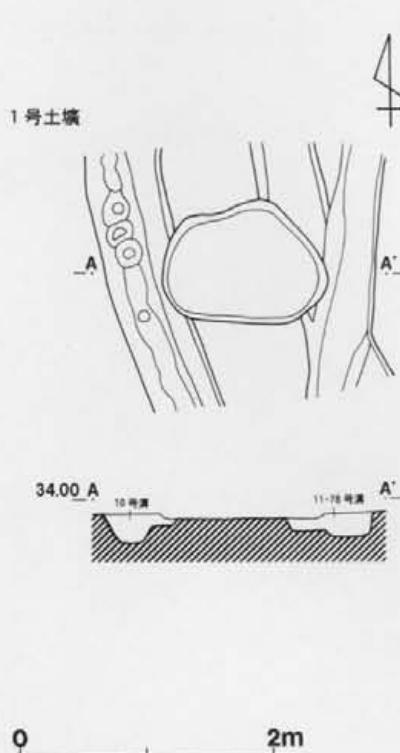
- 1層 灰褐色土 ローム粒。暗茶褐色土粒を少し含む。第36号土壤と同一と思われる。
- 2層 緩灰褐色土 ローム粒を少し含む。
- 3層 黄褐色土 ローム粒。細砂を多く含む。
- 4層 青灰色土 ローム粒をわずかに含む。
- 5層 青灰色土 ローム粒をやや多く含む。

第2号井戸

- 1層 灰白色土 白色粒をやや多く含む。炭化粒、酸化鉄粒を含む。
- 2層 灰白色土 酸化鉄粒をわずかに含む。
- 3層 水素褐色土 硫土粒をわずかに含む。
- 4層 灰褐色土 酸化鉄粒。灰茶褐色土粒をわずかに含む。
- 5層 青灰色土

第3号井戸

- 1層 暗黄褐色粘土 酸化鉄粒を少し含む。
- 2層 暗黄褐色土 ローム粒をわずかに含む。
- 3層 暗黄褐色土 缓灰褐色土粒を含む。
- 4層 黑褐色土 ローム粒をわずかに含む。
- 5層 缓灰褐色土 ローム粒を含む。
- 6層 暗黄褐色粘土 缓灰褐色土粒を少し含む。



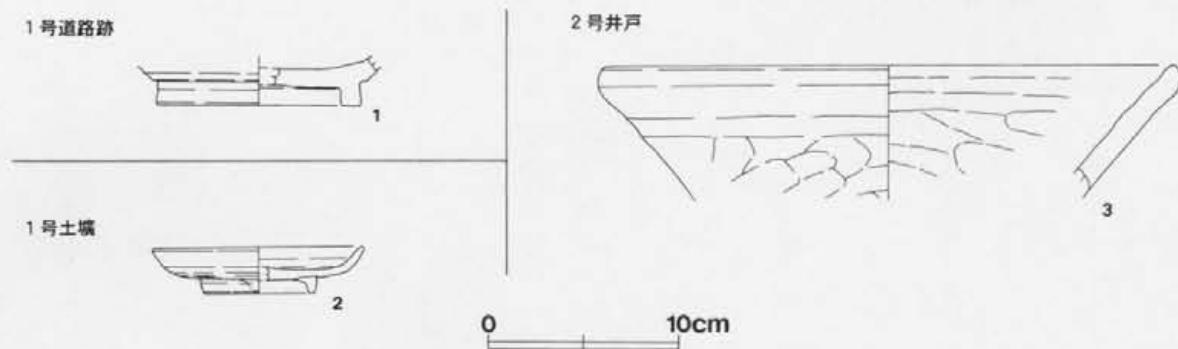
第2号土壤

- 1層 灰白色土 ロームブロック (5cm) を多く含む。
- 2層 緩灰白色土 ロームブロック (5cm)、暗灰褐色土ブロック (5cm) を多く含む。
- 3層 灰白色土 ロームブロック (5cm) を含む。
- 4層 緩灰白色土 ロームブロック (5cm)、暗灰褐色土ブロック (5cm) を含む。
- 5層 黄褐色土 灰褐色土粒を少し含む。

33.70 A

33.70 B

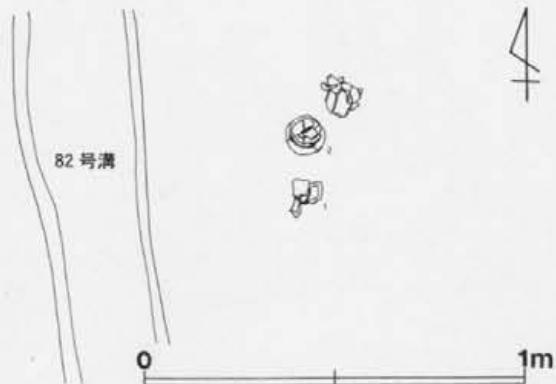
第23図 井戸・土壤実測図



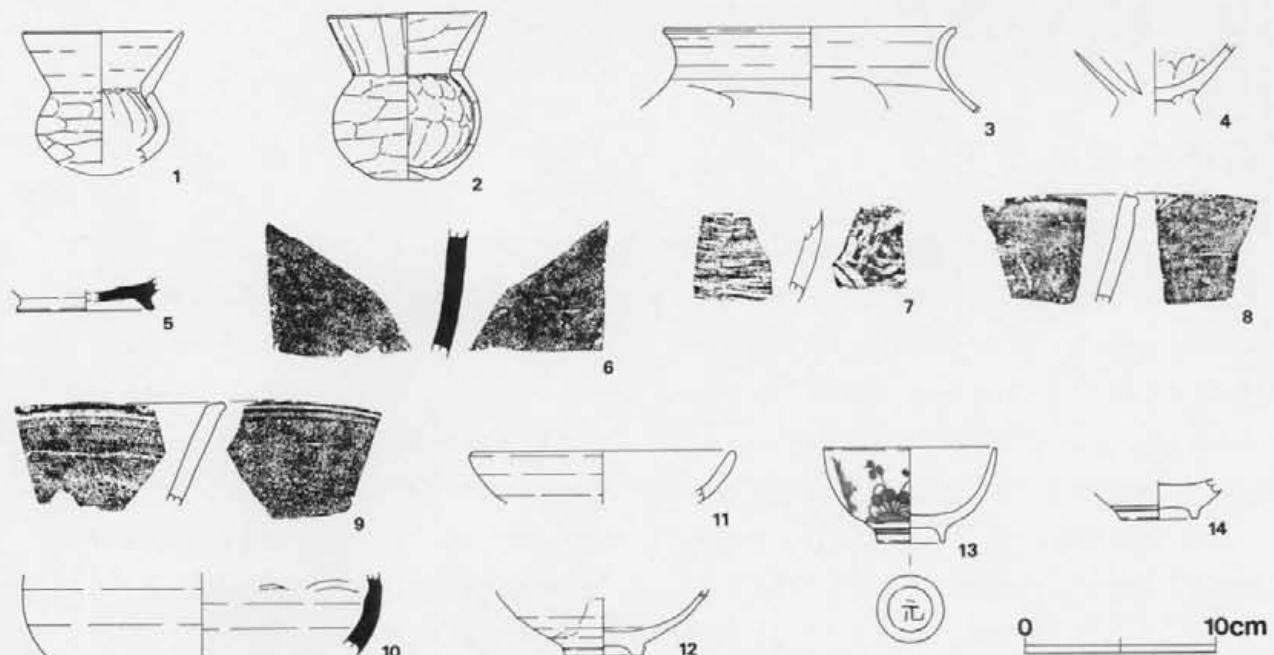
第24図 道路跡・井戸・土壙出土遺物

## 9 調査区出土遺物

遺構に伴わないものと単独で検出されたピットから出土したものを、第26図及び第4表に示した。1、2はD-4グリッドから出土した埴である。出土状況は第25図に示した通りである。検出された遺構群は奈良時代以降であるが、2点は古墳時代中期のものであり、明らかに先行する。1箇所に集中していることから、耕地の境に埋納された等も考えられるが、この時期の耕地の存在は確認できなかった。遺構は検出されなかつたものの、調査区内からは縄文時代後期後半や弥生時代の遺物も出土しており、周辺の開発が比較的早くから行われたことを窺わせる。



第25図 D-4 グリッド遺物出土状況



第26図 調査区出土遺物

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	H	壺	8.4	(7.5)		ABCEH	普	鈍い明橙	50%	D 4グリッド出土。
2	H	壺	8.3	8.7		ABCEH	普	鈍い明橙	95%	D 4グリッド出土。
3	H	甕	(15.3)			ACEH	普	橙		F 6グリッド出土。
4	H	台付甕				ABCDE	普	鈍い橙		D 10グリッドP 1出土。
5	S	高台椀			(7.2)	ACH	不良	灰	10%	D 10グリッドP 1出土。
6	S	壺				ACDFH	良	灰		A 3グリッド出土。
7	HS	壺				ABCH	不良	橙		
8	軟質	焙烙				ACDE	普	灰褐		E 2グリッド出土。
9	軟質	鉢				ACDE	普	黒褐		D 10グリッドP 1出土。外面に緑色の自然釉。
10	S	甕				ACH	良	灰		G 12グリッド出土。内外面に白色の釉がかかる。
11	陶器	椀	(14.0)			AC	良	灰白		内外面に緑青色の釉がかかる。
12	陶器	高台椀			4.0	A	良	灰褐	60%	E 2グリッド出土。
13	磁器	高台椀	(9.1)	5.0	3.5	A	良	白		
14	磁器	高台椀			4.0	A	良	白	20%	

第4表 調査区出土遺物観察表

## V 結 語

### 森下条里の復元

前章まで述べてきた通り、今回の調査では、住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟、柵列跡1基、溝83条、道路跡1条、井戸3基、水田跡等が検出された。遺構の時期は、8世紀から近世に亘る。住居跡・掘立柱建物跡・柵列跡・溝の大部分・水田跡は古代、溝の一部・井戸は中世、溝と土壌の一部・道路跡は近世の所産と考えられる。調査区内の土壌は、住居跡や掘立柱建物跡が検出された東部では砂礫を多く含んでおり微高地であったと考えられ（第27図）、中央部から西部にかけては粘土質である。

集落域は、本調査区の北東から県調査区最も西側に位置する第6区という幅約75mの狭い範囲に収まる。遺構は住居跡と側柱を中心とする掘立柱建物跡があり、県調査区では2×2間の総柱建物跡が2棟検出されている。掘立柱建物跡の時期は確定できないが、住居跡の時期は、8世紀中頃から9世紀にかけてのものと考えられる。主軸の傾きは、県調査区内の側柱建物跡2棟が正方位に近い向きをとるが、他は全て30°程西へ傾く。或る時期に建物群が、一斉に方位を規制されて建てられたとは考えにくく、建物に関しては、地形による規制が継続して強く働いていたものと考えるべきであろう。

次に溝と水田跡については、一体のものとして考えられる。ほとんどの溝は細く浅いものであったが、旧地表面からの掘り込みを考慮すれば、灌漑水路として機能し得たであろう。これらを主軸の傾きや切り合いで時期区分を行った（第27～28図）。建物遺構についても図に含めたが、掘立柱建物跡は時期が確定できなかったため、II期から継続するものと仮定した。

I期は、主水路として第1号溝が存在し、そこから斜行溝が南へ延びる。斜行溝は東側の微高地に沿うものである。第1号溝の掘削時期は明確ではないが、周

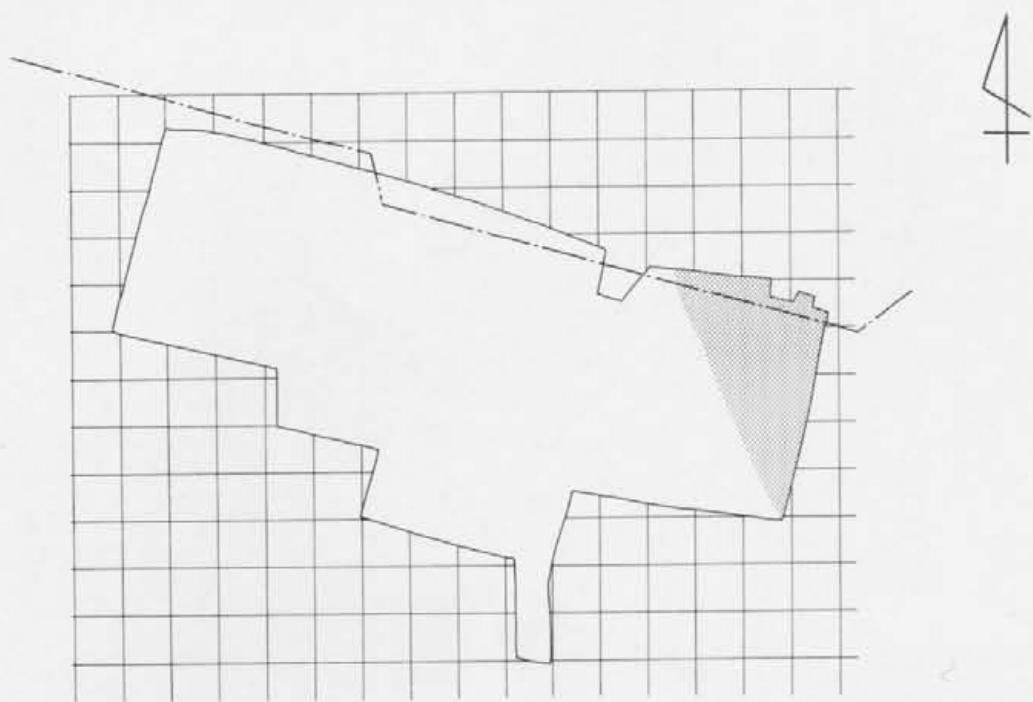
辺を含めての出土遺物に7世紀代のものが認められないことから、8世紀初頭と考えたい。南に広がる水田跡がこの時期から存在するかは不明である。

II期もI期と同様に、第1号溝から斜行溝が南に延びる。斜行溝の方向はI期よりもやや西に傾くもののがみられる。

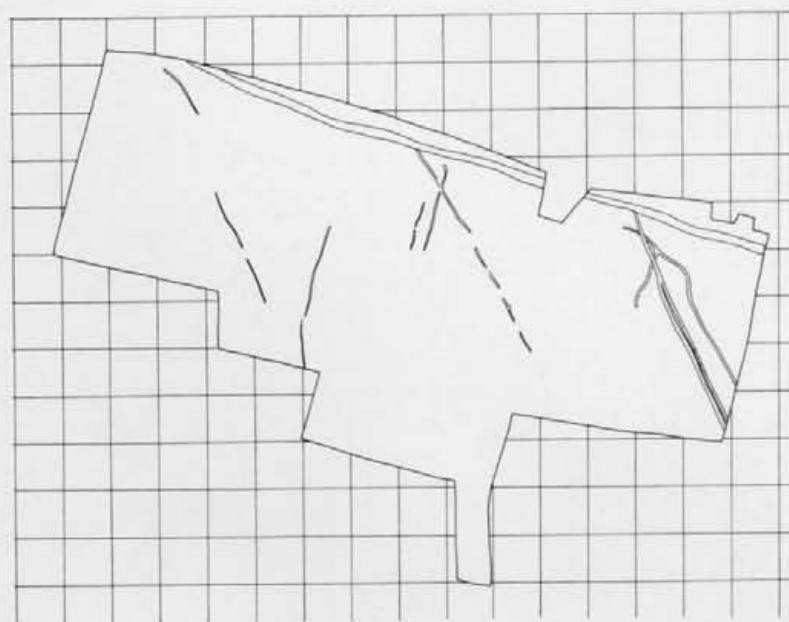
III期は、溝のほとんどが正方位を向く段階である。I・II期と時間幅が異なり長期に亘るものであり、その結果、多条の溝が並行して走る。主水路から南へ延びる溝は正方位に近く、東西に走る溝もわずかに認められる。南に広がる水田跡も正方位をとると思われる。主水路は第9号溝と考えられる。第9号溝は、途中で真南へと方向を変える。その西側には溝、東側には集落と明瞭に分布が分かれることから、集落域と耕地との境をなす機能も併せ持っていたものと思われる。第2号溝も正方位に近いが、この溝の段階には第1号溝が存続していた可能性が高い。第2号溝が前段階のものであるか、III期の初めには第1号溝が存続していた2つの可能性が考えられる。

調査区南部に広がる水田跡は、耕作面が2面確認され（註1）、上部耕作面の上面には一部で砂礫が分布していた。テフラ分析を行ったところ、浅間B軽石を多量に含むことが分かり、水田跡は天仁元年（1108年）に埋没したことが明らかになった。畦畔の痕跡は土層断面からわずかに確認されたが、部分的なもので不明瞭である。

年代観の手がかりは第1号溝である。掘削時期については前述したが、埋没時期については、覆土を噴砂や地割れによって切られているため、弘仁9年（818年）ないし元慶2年（878年）の地震時には、既に埋没していたものと考えられる。地震の時期を仮に古いものとすれば、8世紀末頃までには埋没していたものと思われる。第1号溝がII期までか、III期の初めまで存続していたかという問題もあるが、I期を8世紀前

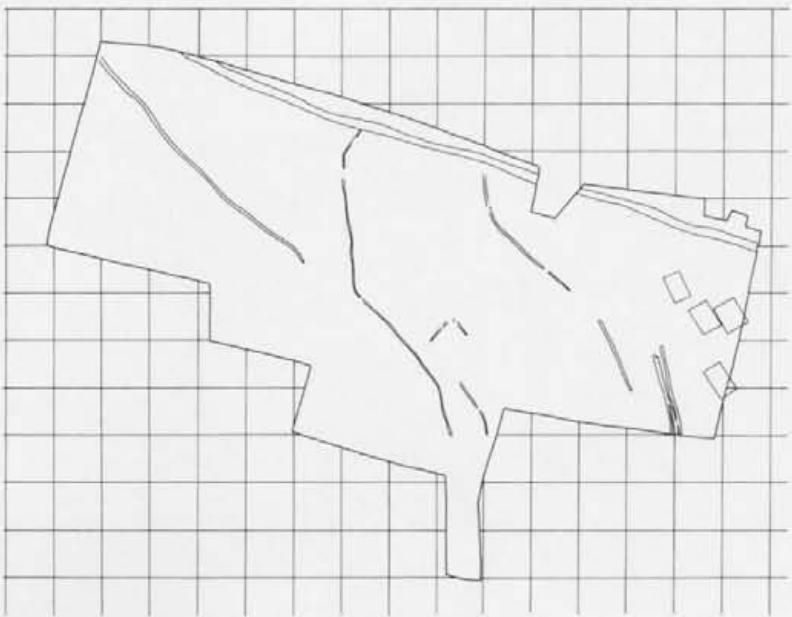


大字境と微高地

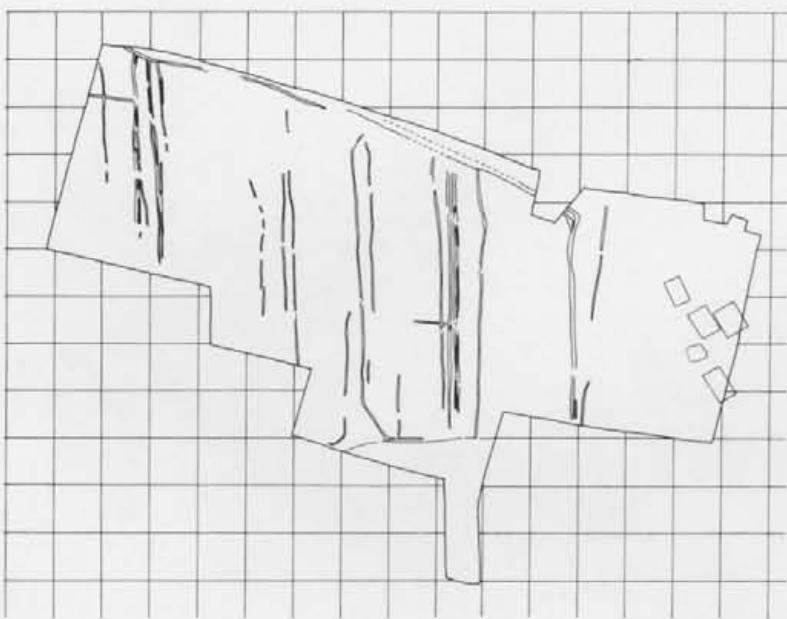


I期

第27図 森下遺跡の変遷(1)(S = 1 / 1,600)



II期



III期

第28図 森下遺跡の変遷(2)(S=1/1,600)



第29図 条里地割推定復元図( $S = 1 / 5,000$ )

葉、Ⅱ期を8世紀中葉、Ⅲ期を8世紀後半以降と推定したい。

溝が正方位を向く段階は、この地に条里が施工される時期と考えられる。これ以前に、地形に制約されるとみられる斜行溝が走る段階があるが、同様の例は岡部条里遺跡・砂田前遺跡等で認められる（註2）。砂田前遺跡では、時期が7世紀前半と古いものだが、本調査区第67号溝の様な屈折する溝が検出されており注目される。鳥羽政之氏は岡部条里遺跡について、溝が斜行する段階を経て、遅くとも8世紀中～後半には正方位の条里地割が成立したことを想定している（鳥羽2004）。森下遺跡の地に条里が施工される時期は8世紀後半頃と想定しているが、中葉まで遡る可能性も考慮すべきであろう。

今回の調査成果、及び県調査成果から想定される条里地割を復元したものが第29図である。条里地割は残っておらず、また検討材料も少ないため、やや冒険的な試案であるが、主水路から南へ折れ曲がり、集落域と耕地とを区画する機能も持つとみられる第9号溝と、

水田跡の北側の縁を基準とし、1町方角に区画を試みた。水田跡の線を東に延ばすと、県調査区第3区で検出された畦畔へと繋がる。南北ラインは、第9号溝から東に2町で、畦畔が平行している。今回の調査区の西側は、確認調査を行ったところ、地形はやや低く、有機物の上を洪水によると思われる厚さ10cm程の粘質土と厚さ5cm程の砂によって覆われている状況が確認されたが、水田跡の可能性は認められなかった。北側はやや地形が高く、高畠という字名が示す通り畑作に向いていたものと想定され、東には河川が流れていると思われる。この地の条里は、規模が余り大きくなかったものであったであろう。なお、水路は近代の河川の状況を参考にすると、福川或いはその支流から伸びていたものと想定される。

現在の大字の境は、第1号溝等主水路が走る線に当たり、北側が大字高畠、南側が大字上敷免である（第27図）。ほぼ同じ付近を走る第36号溝は中世段階の主水路と思われ、連綿と水路が造られた場所と考えられる。北側の大字高畠は、その名の通り地形が高く、主水路

はその縁を沿うように造られたと思われ、第1号溝の延長部分と思われる溝が、西側の戸森松原遺跡の東端で検出されている。その南に広がっていたと思われる条里地割は、近代には部分的に正方位の地割を残すのみとなり、条里の復元は難しいものとなる。近現代に本調査区内に流れていたという水路は斜行していた様であり、地割は再び地形に規制されていったものと思

われる。

最後に改めて、この発掘調査に深いご理解とご協力を頂いた深谷市・岡部町共同事務組合の方々を始め、森下遺跡の発掘作業、整理作業に携わり、文化財を記録保存して後世に残すことにご尽力頂いた皆様に敬意を表したい。

#### （註）

- (1) 耕作面及び耕作土については、土壤観察による所見であり、プラントオパール分析等は行うことはできなかったことをお断りしておく。
- (2) 鳥羽政之氏のご教示による。

#### （参考文献）

- 岩田明広 1998 『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集  
劍持和夫 1995 『森下・戸森松原・起会』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第148集  
佐藤康二他 1998 『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第198集  
鈴木徳雄 2005 「児玉条里と灌漑の体系－土地区画と灌漑系統を見る地域的伝統－」  
シンポジウム『関東条里研究の現段階』発表要旨  
富田和夫 2002 『熊野遺跡（A・C・D区）』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第279集  
鳥羽政之 2004 「東国における郡家形成の過程」『幸魂－増田逸郎氏追悼論文集』北武藏古代文化研究  
鳥羽政之 2005 「埼玉の条里－榛沢郡家との関係を中心に－」  
シンポジウム『関東条里研究の現段階』発表要旨  
中村倉司 1999 『岡部条里／戸森前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第217集  
福田 聖他 2002 『大寄遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集  
三友国五郎 1959 『関東地方の条里』埼玉大学紀要社会科学編（歴史学、地理学）第8号  
宮本直樹 1998 『岡部条里遺跡』岡部町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第3集

# 付編 森下遺跡におけるテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

深谷市に所在する森下遺跡は、妻沼低地の北西部に位置し、自然堤防上の微高地に立地する。今回の調査区は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査区西端部の6区に近く、溝や道路跡とされる遺構および埋没した水田層などが検出されている。これらの遺構の覆土には、テフラと考えられる砂層や砂粒が多く認められている。本報告では、上述の各遺構から検出されたテフラと考えられる砂層や砂粒の分析から、その碎屑物の特徴を明らかにし、既存の指標テフラとの対比試み遺構の年代資料を得ることとする。

## 1. 試料

試料は、調査区内で検出されたSD1、SD17、SD19、SD36、SD70の5条の溝の覆土上面からそれぞれ1点、発掘調査所見では道路跡とされているSR1の上面から採取された1点、水田作土と推定されている8層を覆う7層とされた厚さ5cm程度の砂層から採取された1点の合計7点である。各試料の試料名、色

調などは、分析結果を示した表1に併記する。

## 2. 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

## 3. 結果

分析結果を表1に示す。以下に各試料について述べる。

SD1：処理後に得られた砂分には、スコリア・火山ガラス・軽石のいずれも認めることはできなかった。砂分を構成する主な碎屑物は、石英や斜長石などの鉱物粒であり、これにチャートなどの岩片や赤褐色を呈する酸化鉄粒などが混在する。

試料名	色調	試料の質	スコリア	火山ガラス	軽石			備考
			量	量	量	色調・発泡度	最大粒径	
SD1	暗褐	砂質シルト	-	-	-	-	-	酸化鉄粒少量
SD17上面	灰黄褐	粗砂	-	-	+++	GBr・sb	2.0	酸化鉄粒中量
SD19上面	暗褐	砂質シルト	-	-	++	GBr・sb	2.0	酸化鉄粒多量
SD36(西)覆土	褐灰	砂質シルト	-	-	++	GBr・sb	2.0	酸化鉄粒多量
SD70上面	灰黄褐	細礫混じり粗砂	-	-	++++	GW・sg	4.0	遊離結晶(pl, opx) 多量
SR1上面	灰黄褐	砂質シルト	-	-	+++	GBr・sb	2.0	酸化鉄粒中量
水田作土上面	灰黄褐	細礫混じり粗砂	-	-	++++	GBr・sb	4.0	遊離結晶(pl, opx)、安山岩片中量

凡例 - : 含まれない、(+) : きわめて微量、+ : 微量、++ : 少量、+++ : 中量、++++ : 多量。

B : 黒色、G : 灰色、Br : 褐色、GB : 灰黒色、GBr : 灰褐色、R : 赤色、W : 白色、GW : 灰白色。

g : 良好、sg : やや良好、sb : やや不良、b : 不良、最大粒径はmm。

cl : 無色透明、br : 褐色、bw : バブル型、md : 中間型、pm : 軽石型。

第1表 テフラ分析結果

**S D 17上面**：中量の軽石が認められた。軽石は、最大径約2.0mm、淡褐灰色を呈し、発泡はやや不良である。斜方輝石の斑晶を包有するものも認められる。また、灰黒色を呈する比較的新鮮な角礫状の安山岩片も少量ではあるが、特徴的に含まれる。他に中量程度の酸化鉄粒や少量のチャート岩片なども含まれる。

**S D 19上面**：少量の軽石が認められた。軽石の特徴は、上述のS D 17上面試料に認められたものと同様である。ただし、軽石の中には表面が赤褐色に風化したものも認められる。また、S D 17上面試料と同様の特徴を有する安山岩片も認められる。なお、本試料には酸化鉄粒が多量に含まれている。

**S D 36（西）覆土**：砂分の特徴は、少量の軽石が含まれることをはじめとしてほぼ上述のS D 19上面試料と同様である。

**S D 70上面**：多量の軽石が認められた。軽石は、最大径約4.0mm、灰白色を呈し、発泡はやや良好である。斜方輝石の斑晶を包有するものも認められる。また、斜方輝石と斜長石の新鮮な遊離結晶も多量に含まれ、その中の多くは表面に火山ガラスが付着している。なお、上述の試料のうち、S D 1を除く3点に認められた新鮮な安山岩片は、本試料には認められない。

**S R 1上面**：砂分の特徴は、中量の軽石が含まれることなどほぼ上述のS D 17上面試料と同様である。

**水田作土上面**：多量の軽石が認められた。軽石は、最大径約4.0mmであるが、色調や発泡度および斜方輝石の斑晶を包有することなど、その特徴は上述の試料のうち、S D 17、S D 19、S D 36、S R 1に認められたものと同様である。また、それらの試料に認められた新鮮な安山岩片も本試料には中量程度含まれる。なお、火山ガラスの付着した斜方輝石と斜長石の新鮮な遊離結晶も認められるが、安山岩片と同量程度である。

#### 4. 考察

上述した砂分の状況から、S D 70上面および水田作土上面の2点が採取された砂層は、軽石質テフラの降下堆積層であると考えられる。軽石の特徴およびそれに伴う遊離結晶や岩片などの状況から、S D 70上面のテフラ層は浅間A軽石（As-A：新井、1979）、水田作土上面のテフラ層は浅間Bテフラ（As-B：新井、1979）にそれぞれ対比される。いずれのテフラも浅間火山を給源とし、As-Aは江戸時代の天明3年（1783年）、As-Bは平安時代末の天仁元年（1108年）に噴出したとされている。したがって、S D 70はAs-Aの降下以前に構築された溝であることはほぼ確実であり、8層は、As-B降下時の水田作土であったといえる。なお、本遺跡のこれまでの調査結果によると、窪地とされる範囲にAs-B層が広範にわたって認められており、畦畔に類似した帶状の高まりも検出されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団、1995）。

S D 17、S D 19、S D 36の各溝覆土から検出された軽石は、上述の水田作土上面のものと同様であることから、As-Bの軽石に同定される。ただし、各試料には、As-Bとは由来の異なる碎屑物（石英粒やチャート岩片および酸化鉄粒など）も比較的多く認められる。したがって各試料の採取された砂層または土層は、溝内に降下堆積したAs-B層が搅乱を受けたものであるか、あるいは溝周囲に堆積したAs-B層が風化や降雨などにより溝内に流れ込んだものであると考えられる。前者の場合は、降下堆積層である場合と同様に溝の構築年代はAs-Bの降下以前であるといえる。しかし、後者の場合は、その土層が溝内に埋積した年代がAs-B降下以降であることはいえるが、溝の構築年代としては、As-B降下以前と降下以降の両者が考えられる。したがって、上記3条の溝の構築年代については、調査区内における各溝の層位とAs-Bの降下堆積層である7層またはその直下の層である8層との層位関係などからも検討する必要がある。

また、道路跡とされたS R 1も、上面よりAs-Bの軽石が比較的多く検出されたが、S D 17、S D 19、

S D 36の各溝覆土と同様にその軽石および碎屑物の検出状況から、道路の構築年代として、A s - B 降下以前と降下以降の両者が考えられる。

なお、S D 1については、覆土からテフラを特定で

きるような碎屑物が得られなかつたことから、今回の分析結果からは、その構築年代について議論することはできない。

#### 〈引用文献〉

新井房夫, 1979, 関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層. 考古学ジャーナル, 157, 41-52.

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団, 1995, II 遺跡群の立地と環境・III 森下遺跡の調査. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第148集 深谷市森下・戸森松原・起会 一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告-IV-, 7-21.

# 写 真 図 版

# 図版 1



調査区東部(1)



調査区東部(2)



調査区東部(3)



調査区東部(4)



調査区東部(5)



調査区東部(6)



調査区中央部(1)



調査区中央部(2)

図版 2



調査区中央部(3)



調査区中央部(4)



調査区中央部(5)



調査区西部(1)



調査区西部(2)



調査区西部(3)



調査区西部(4)



調査区南部(1)

### 図版 3



調査区南部(2)



第13図 1 出土状況



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡



第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡



第3号掘立柱建物跡

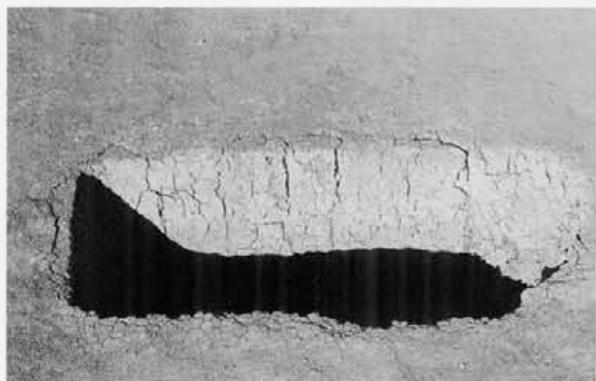


第4号掘立柱建物跡

図版 4



第 1 号柵列跡



第 2 号土壤



第 1 号井戸



第 2 号井戸



第 1 号溝(1)



第 1 号溝(2)



第 1 号溝(3)



第 1 号溝 S P A - A'

## 図版 5



第1号溝SPD-D'



第1号溝SPE-E'



第1号溝SPH-H'



第1号溝SPI-I'



第1号溝SPJ-J'



第1号溝遺物出土状況



グリッド遺物出土状況

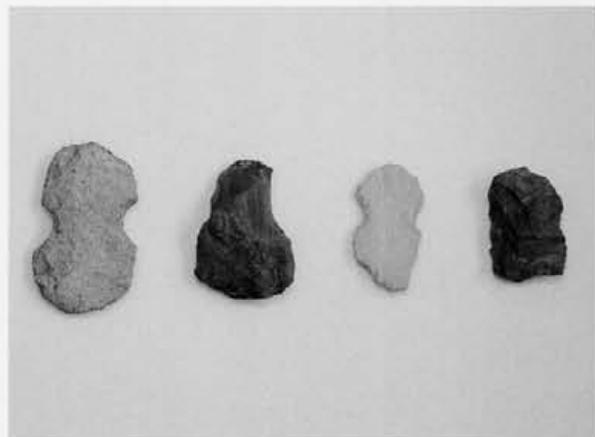


調査風景

図版 6



縄文・弥生土器



石器



1号住居跡 1



1号住居跡 5



1号住居跡 4



1号住居跡 6



1号住居跡出土遺物

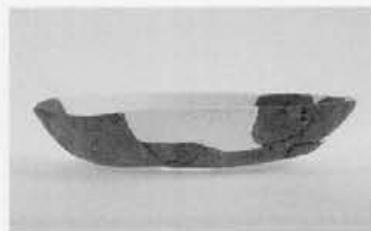
## 図版 7



2・3号掘立柱建物跡出土遺物



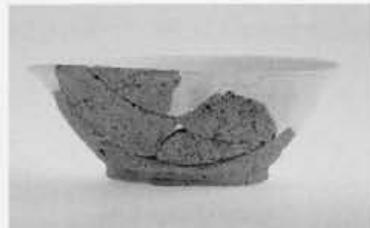
1号溝 1



1号溝 2



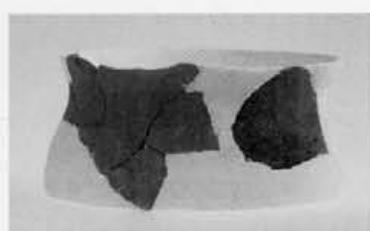
1号溝 4



1号溝 3



1-19号溝 5



1-19号溝 7



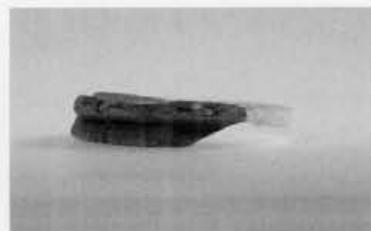
1-19号溝 8



1-19号溝 9



1-19号溝 10



1-19号溝 11



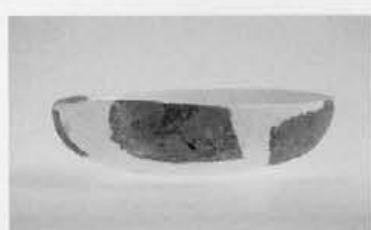
1-19号溝 12



6号溝 21



19号溝 36



39号溝 39

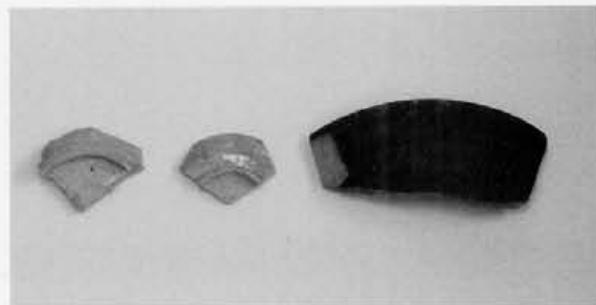


43号溝 40

図版 8



溝出土遺物



道路跡・土壤・井戸出土遺物



調査区 1



調査区 2

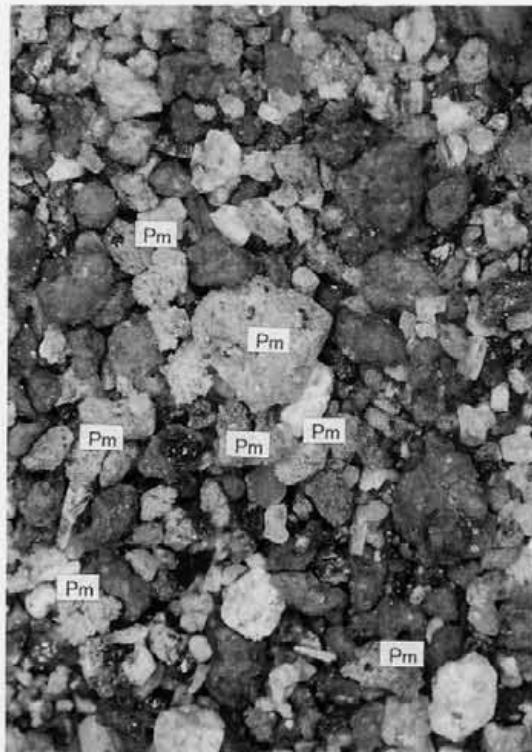


調査区出土遺物

## 付編図版



1. 砂分の状況 SD1



2. 酸化鉄粒とAs-Bの軽石 SD19上面



3. As-Aの軽石 SD70上面



4. As-Bの軽石 水田作土上面

Pm: 軽石

1.5mm 2mm  
1 2,3,4

# 報告書抄録

ふりがな	もりしたいせき						
書名	森下遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第73集						
編著者名	知久裕昭						
編集機関	深谷市教育委員会						
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本住町17-3 TEL 048-572-9581						
発行年月日	2005年1月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 (° ′ ″)	東経 (° ′ ″)	調査 期間	調査 面積	調査 原因
もりしたいせき 森下遺跡	ふかやしむねあざじょうしきめん 深谷市大字上敷免 あざほんだ856-1ほか 字本田856-1他	11218	251	36 12 31	139 17 16 20021105 ～ 20030312	8,000 m <sup>2</sup>	消防本部 庁舎建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
森下遺跡	集落跡 条里跡	奈良時代 平安時代 中世 近世	竪穴住居跡 1軒 掘立柱建物跡 4棟 柵列跡 1基 溝 83条 道路跡 1条 井戸 3基 土壙 2基 水田跡	縄文土器 弥生土器 石器 土師器 須恵器 陶磁器	集落跡と条里施工前後の溝 ・水田跡を検出		

---

---

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第73集

森 下 遺 跡

印 刷 平成17年1月27日  
発 行 平成17年1月31日

発 行 深 谷 市 教 育 委 員 会

---

---